

月廿七日之夜、恰も日本海大海戦に於て我海軍の大捷を得たる日なり、近年に至り富山市醫學博士島權次郎によりて發光は一種のバクテリアに基因することを發見せられたり、螢鳥賊の漁獲期は四月上旬より六月上旬頃までなるを以て、此期間にありては滑川並に魚津の漁場に於て夜間常に之が壯觀に接することを得、而して本種は眞に世界的珍動物にして、大正十一年三月八日内務省告示第四九號を以て天然記念物として指定せらるゝに至れり。

雷鳥 古來雄山神社の神使として尊崇せられ、別山淨土山鬼獄五色ヶ原方面に最も多く棲む七月下旬雛と共に高山植物の間に飛遊し、夏季は羽毛黄褐色なるが、冬季には白色と變し、脚より趾端に至るまで羽毛を帶ぶ、大正十二年三月七日内務省より天然記念物に指定せらる。

白馬連山高山植物帶 下新川郡舟見町愛本村内山村の地に跨り大蓮華山の別名白馬連山の一部分を爲す植物帶にして、其の種類珍稀のもの多く、且發育旺盛にして本邦高山植物中最も特色あるものなり、大正十一年十月十二日内務省より天然記念物として指定保存せらる。

十二町湯鬼蓮發生地 氷見郡氷見町の南西に在り、一に布勢湖ともいふ、周廻一里餘、氷見町に流入し海に注ぐ、古は布勢の海とて湖面頗る廣く風光明媚なりしより、大伴家持屢々遊覽吟詠せし所なり、湖中には鰻、鱒等を生ず、湖面には鬼蓮多し、鬼蓮は本邦固有の巨大なる水草にして、葉片の大なるものは、直徑五六尺に達するものあり、南米アマゾン河の大鬼蓮に類似せる珍奇なる種類なり、大正十二年三月七日内務省より天然記念物に指定せられ、其の種子を採取することを禁ぜられたり。

上日寺の公孫樹 氷見郡氷見町朝日山眞言宗上日寺境内に在り、周圍五丈、高廿五間の大樹にして、太古より存在せりと傳へ、柱瘤多く十數本垂下せり、大正十五年十月二十日、内務省より天然記念物として指定せらる。

利賀のとちのき 東礪波郡利賀村利賀字東山に在り、大正十五年十月廿日内務省より天然記念物として指定されしものにして、幹圍約卅三尺あり、地上九尺の所より數幹に岐れ繁茂す、トチの木は落葉喬木にて本邦及支那の北部に産する珍木なり。

脇谷のとちのき 東礪波郡利賀村栗當字脇谷に在り、幹圍卅九尺にして、地上八尺より上部は漸次太くなり、十三尺の處より數幹に岐る、南西より北東に延伸し、其の距離廿數間に及び、枝葉繁茂し、遠くより之を望み得らる、大正十五年十月廿日内務省指定の天然記念物なり。

毘沙門杉 東礪波郡北般若村西部金屋に在り、廻り三丈二尺五寸、地上七、八尺の處にて四幹となり、枝葉繁茂し、遠方より望み見ることを得べし、毘沙門の名は樹間に其の石像の安置されしに由る、大正十三年十二月九日内務省より天然記念物として指定せられたり。

第十八章 温泉、鑛泉及海水浴場

第一節 温泉

立山温泉 常願寺川の上流、湯川の左岸、上新川郡大山村平夷の地に在り、大小數棟の客舎は優

に五六百人を容るゝに足る、開湯期間は毎年六月一日より十月中にして、毎年の浴客延人員數方に達す、炭酸泉にして少量の硫黄を含み、主治効能は胃腸病、腦病、神經衰弱等なり、夏季に於ける浴客は立山登山を目的とするもの多く、通常芦峯寺より藤橋に至り温泉道によりて直ちに本泉に着き、天候を見定めて早朝出發するを例とす、附近には景勝の地多く、刈込池、新湯、多枝原池、鱒池等最も遊覽に適す、殊に新湯は温泉より約二十町の上流に在り、間歇熱泉にして有名なる玉滴石、珪華の産地なり。

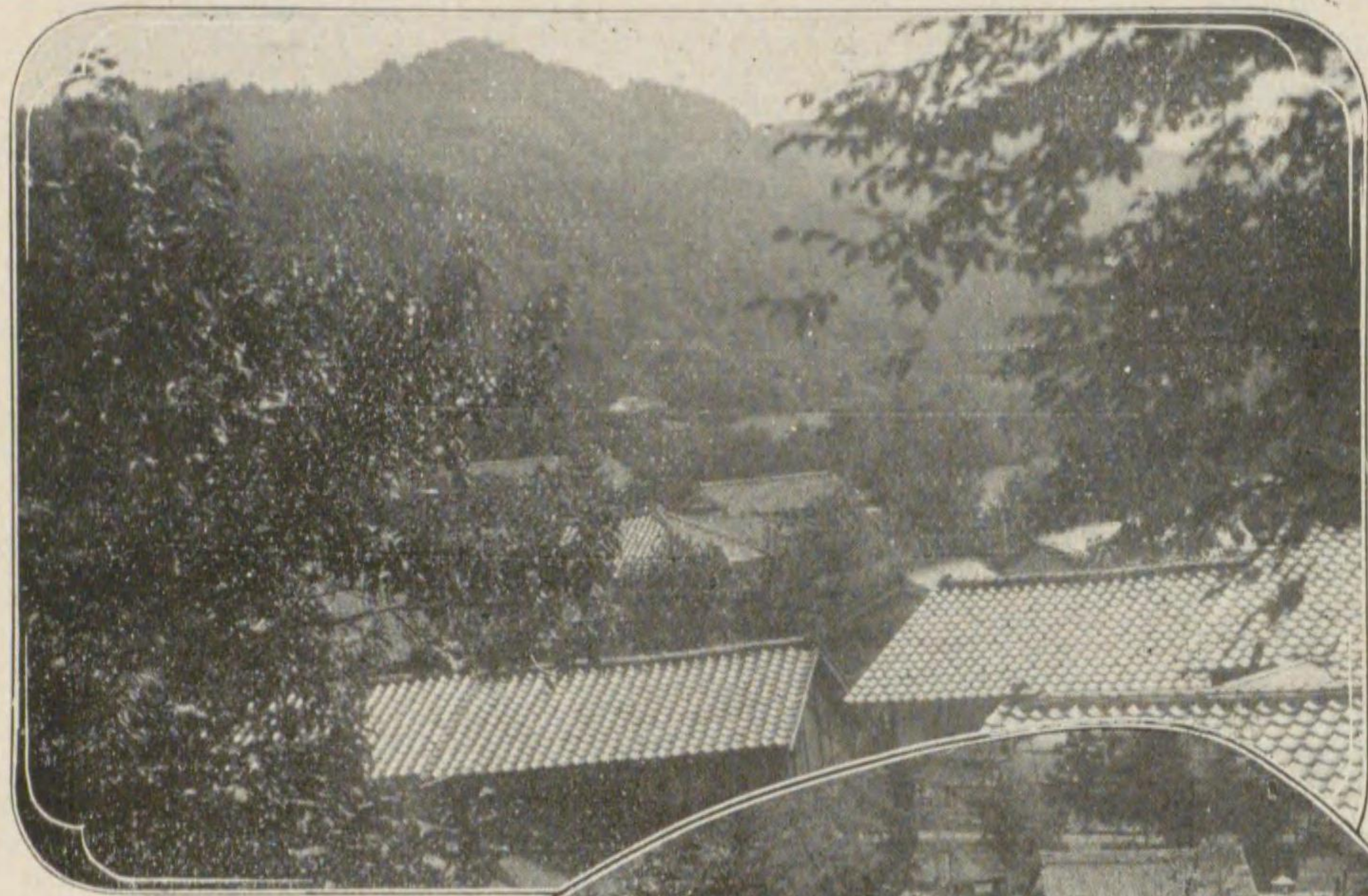
山田温泉

八尾町の西二里古里村の南西三里の山間に在り、地は婦負郡山田村に屬す、四面峰巒を以て圍まれ、綠樹蒼鬱靜かに暑を避け氣を養ふに宜し、温泉は鹽類泉にして消化器病、皮膚病等に奇効あり、遠く他邦より來り病痾を醫するもの多し、元祿九年十月前田正甫此地の勝を探り温泉亭、山田川、藥師堂、花久塚、方便水、虹霓瀧、鏡ヶ窪、蝙蝠窟の景を賞し、翌年四月山田八景の詩を賦せられ、爾後前田利保も歲時遊浴せりと云ふ。

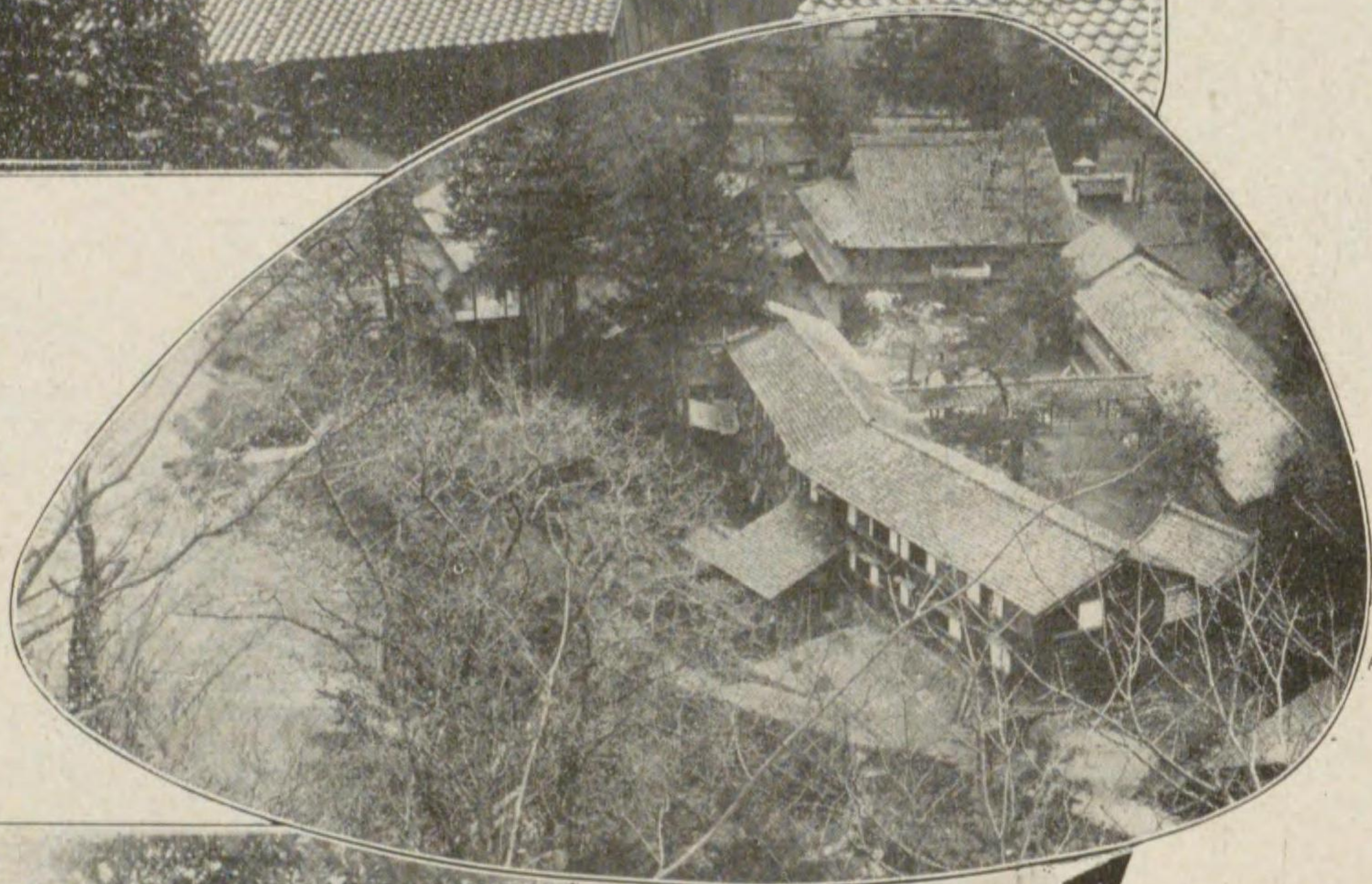
宇奈月温泉

此陸本線三日市驛より發する黒部鐵道の終點、下新川郡内山村宇奈月驛の北約一町に在り、黒部鐵道會社の經營に屬し、黒薙川の溪谷なる二見、黒薙兩温泉の引湯に係る、此地は黒部峽谷の立關、日本アルプスの北門にして、四周廣濶山容水態凡を抜き俗を脱するものあり、附近に立ち並ぶ各種の建築、對岸なる發電所並に其間に架せる軌道の景致等能く自然の風物と調和して自ら異境に在るの感あり、此地には又スキー場あり、其の地域約六万坪に及び、平原丘陵各種地形に伴ふスロープを有し、隨意のコースを選ぶ事を得、其地形の多樣なると、雪質の佳良なると、展望の壯

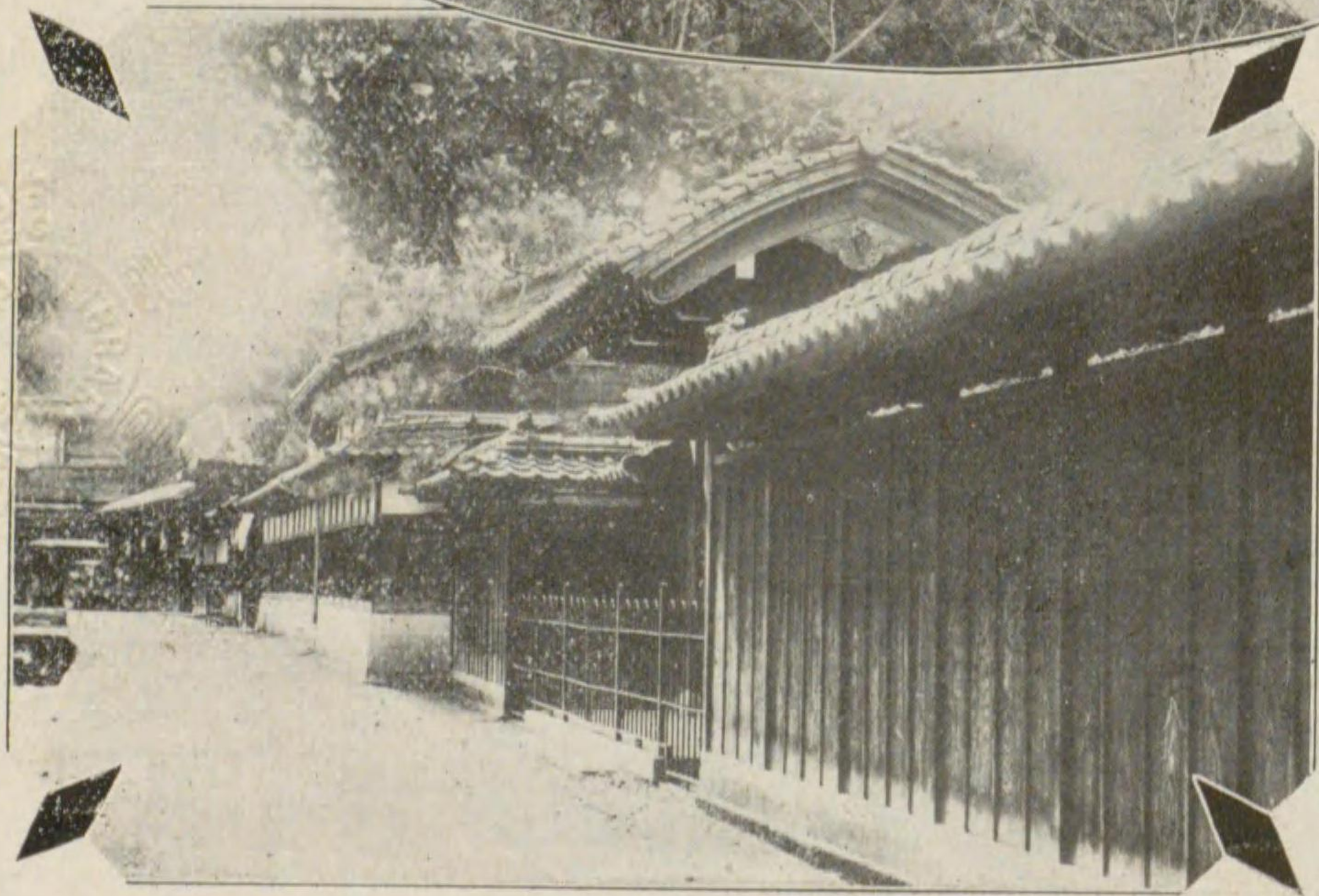
小川温泉



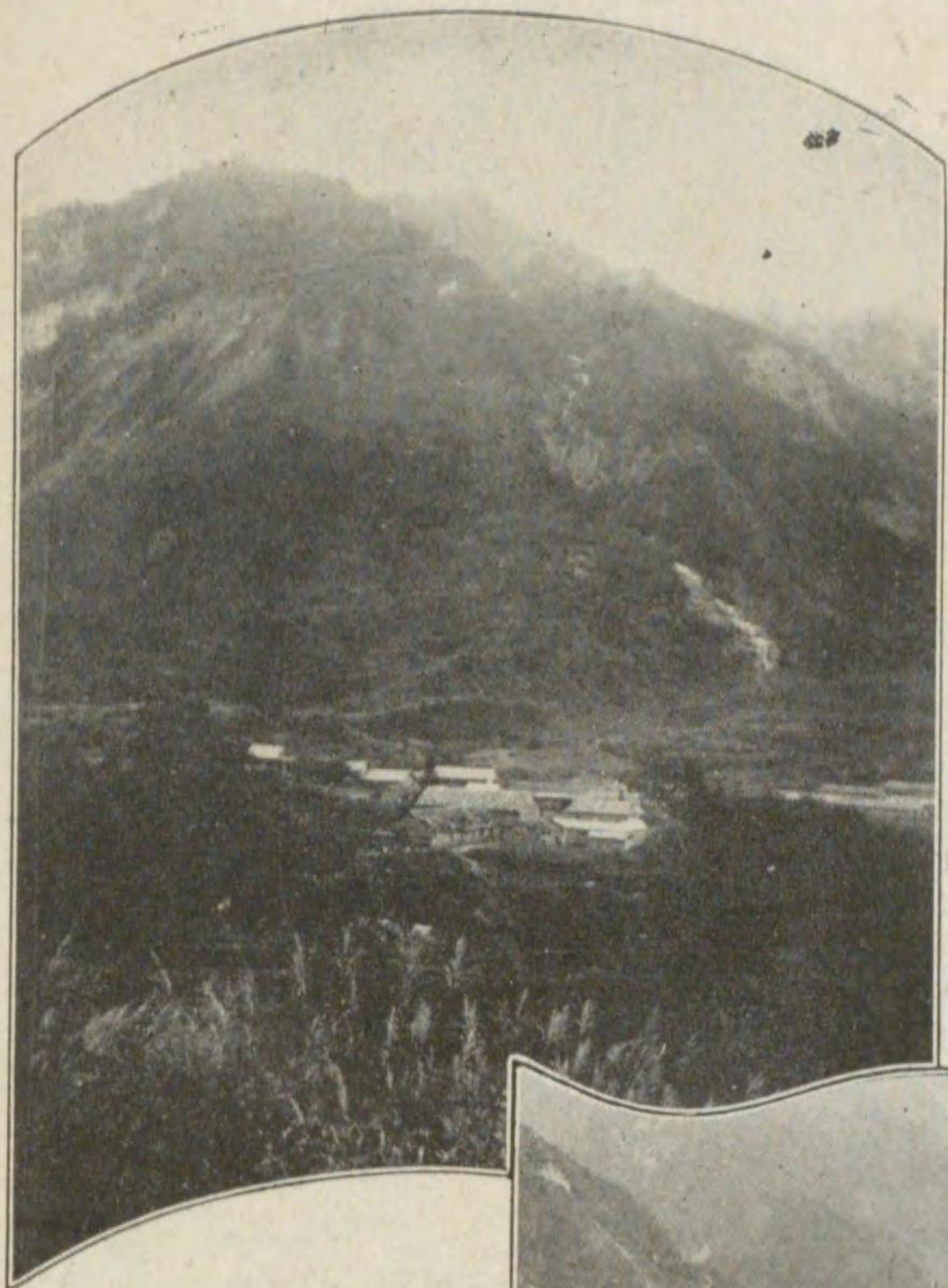
山田温泉



城端ラジューム泉



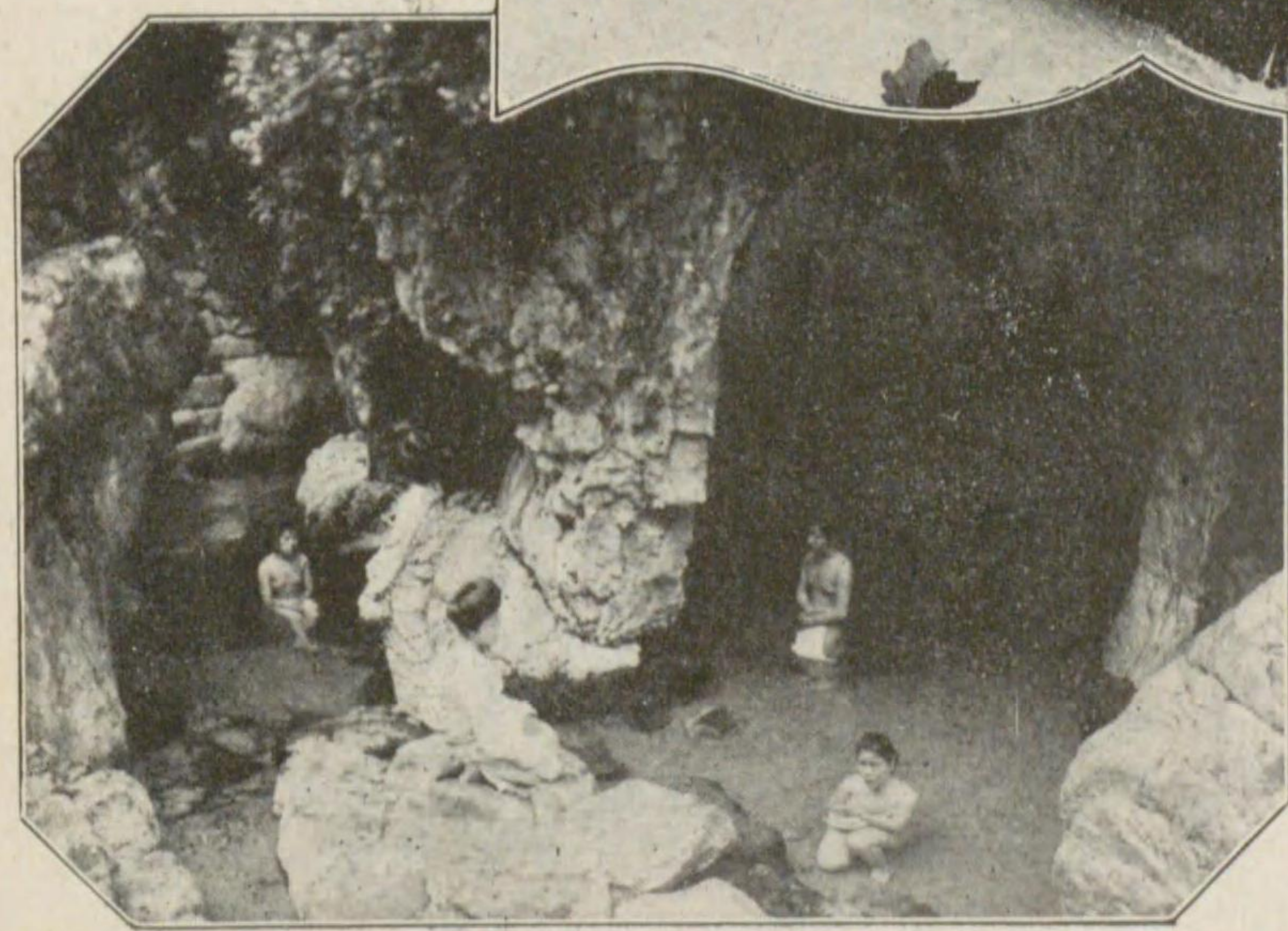
立山温泉



宇奈月温泉



鐘釣温泉



観と更に交通の至便と加ふるに温泉場を備ふるを以て蓋し理想的のスキー場と謂ふべし。

黒薙温泉

宇奈月温泉と共に今は黒部鐵道會社の經營に屬す、宇奈月より二里五町、黒部林道を黒薙分岐點より左に分れ、黒薙川右岸を溯ること十四、五町にして達す、黒薙川右岸の河域、下新川郡愛本村に在り、屏風の如くそゞり立つ突坂山の峭壁相迫る間に黒薙川の奔流激越して客舎の樓端に咆哮するを見る、地境狭くして數棟の客舎善美ならざれども、本泉の起原は極めて、古く古來名泉として夙に世に著はる、塩類泉にして婦人病、貧血症等に効驗著しく浴客多し。

新鐘釣温泉

東鐘釣山の南麓黒部の河域中に湧出す、水車によりて高く汲み揚げ、之を對岸の浴場に送る、宇奈月終點より四里十四町、下新川郡愛本村の地に在り、數棟の客舎は何れも清洒にして四個の大浴槽には絶えず靈泉の溢るゝものあり、泉は無色澄明微に塩味を有し、胃腸病、腦病、神經病に特效ありと稱せらる、附近一帶黒部清瀬の山脚に激越するあり、針葉潤葉の樹林相映發するあり、鐘釣橋、新鐘釣橋等奇橋の架せらるゝあたり、實に尊き幽邃の一勝區なり。

鐘釣温泉

新鐘釣温泉より對岸の林道を行くこと七八町にして達す、西鐘釣山の麓花崗岩と接觸せる石灰岩の間より湧出する炭酸泉なり、別に浴舎の設けなく、湧き出づる靈泉を一大岩窟の間に通して、自然の大浴槽をなせる光景は到底他に之を得べからざる趣あり、其の川をなして湧出する泉量と、泉質の玲瓏にして快味なることは本泉の誇りとする所なり、本泉の濫觴は文政二年の昔にあり、林道の開通、浴客の増加に伴ひ、今は客舎の新築設備の改善等に力を致し、着々面目を改めつゝあり、本泉は元大間知某の經營する所なりしも、昭和五年日本電力株式會社の所有に屬し、今は

黒部鐵道株式會社に於て經營す、近來登山熱の旺盛なるに伴ひ、黒部峽谷探勝の策源地として夏季登山者等の入浴頗る多し、原始的たる靈泉に身を浸しつゝ、黒部の碧潭を隔て、對岸の峭壁を仰ぐときは、百貫山の連嶂側立數千尺、直に面を掠めて立てるを見る、幽邃にして清絶眞に無上の靈境たるを失はず。

祖母谷温泉 鐘釣より約三里、樺平に至り、吊橋によりて對岸祖母谷に移り行くこと僅にして達す、明治卅八年魚津町朝田某初めて之を經營せしが、其の後に至りて廢絶し、唯客舎の一部僅かに殘存す、攝氏百度の高温を有する硫黄泉にして無色透明の亞爾加里鹽類泉なり、此地白馬岳方面、大黒岳方面に通する要路に當り、黒部峽谷と信州との連絡並に信州方面より黒部に出て、更に立山方面に杖を曳かんとするもの、通るべき通路なり、今後黒部峽谷の開發に伴ひ本泉の再興を見るは炳なる所にして其の期も近きにあるべし。

小川温泉 下新川郡泊町の東南小川の上流山崎村藥師山の麓より湧出す、元伊東祐賢の經營に係るものにして客舎浴槽等規模の壯大なるものありしが、明治四十五年七月の洪水に際して是等の建築物悉く流失し殆んど其の形骸を止めざるに至れり、其の後小川温泉株式會社を組織して三里餘の間、引湯工事によりて之を泊町に移す事となり、大正三年七月完成を告ぐるに至れり、屋宇輪奐設備完全し、背後に馬蠶山を負ひ眼下に有磯海を俯瞰し、山海の景色を併せ有するを以て遠近の浴客四季絶ゆることなし。

大牧温泉 東礪波郡利賀村大牧に在り、加越鐵道青島町驛より庄川に沿ひ凡三里、又井波町より杉谷の捷徑を越へ行く所に在り、庄川右岸に石を疊みて浴槽を設けられたる天然の形勝地なり、消化器病、貧血病、婦人病等に特効あり、鹽類泉にして夏時浴客常に充滿す。

湯谷温泉 東礪波郡東山見村湯谷に在り、青島町驛又は井波驛より約一里なり、温泉は庄川の河中より噴出し、川に沿ひ浴場を設けあり、風景絶佳、浴客常に絶えず。

第二節 鑛泉

古宮鑛泉 上新川郡堀川町西中野に在り、皮膚病、痔疾、婦人病等に特効あるを以て富山市及近在より來浴するもの多し。

稻荷鑛泉 上新川郡奥田村稻荷に在り、富山市稻荷町より四丁、自動車等の便あり、貧血病、痔疾、胃病等に効あり。

春日鑛泉 上新川郡大澤野村春日に在り、富山鐵道笹津驛より約七町にして達す、神通川の碧流に臨む勝地にして、客舎廣く其の設備宜しきを以て四時來湯するもの多し。

合田鑛泉 上新川郡大久保町合田に在り、富山鐵道大久保町驛より約五町なり、便秘、逆上、症、胃腸加答兒等に効あり。

舟見鑛泉 下新川郡舟見町に二種の鑛泉あり、一はアルカリ性炭酸泉にして俗にラムネ湯と稱し、神經痛、リウマチス、皮膚病等に効あり、他の一は鐵鑛泉にして、神經性疾患、生殖器病等に効あり

生地鑛泉 下新川郡生地町に在り、天文年間上杉謙信、新治八幡宮の御神託により之を發見し

たりと云ふ、一乗上人の浴場開設に係る由緒ある鑛泉なり、ラジウム含有食鹽泉にして、其ラジウム含有量は縣下第一、固形物總量の多き事全國に於て屈指とせらる、醫治効能は胃腸病、神經痛、リウマチス、生殖泌尿器病にして、客室の設備整頓と相俟ち來浴するもの多し、此地は白砂青松廣袤たる越湖の濱を控ゆるを以て絶好の保養地なり。

北山鑛泉 下新川郡松倉村北山に在り、魚津町より約二里にして乗合自動車等の便あり、癩瘡、質斯、神經衰弱、貧血病、皮膚病等に効あり。

魚津ラジウム鑛泉 下新川郡魚津町字紺屋町に在り、貧血性疾患、消化器病、皮膚病等に効あり。

境鐵鑛泉 下新川郡境村境に在り、泊驛より東方約一里半、自動車、人力車の便あり、營養不良、生殖器病、神經痛に効あり、客舎は自炊部のみなり。

宮崎鑛泉 下新川郡宮崎村宮崎に在り、泊驛より約一里、自動車、人力車の便あり、神經性疾患、婦人病に効あり。

鯨鑛泉 婦負郡八幡村今市に在り、痔疾、慢性癩瘡、質斯、脚氣、創傷、梅毒に特効あるを以て越中鐵道を利用し湯治に來るもの多し。

山吹鑛泉 婦負郡室牧村高熊に在り、八尾町より約三町、自動車等の便あり、客舎多し、癩瘡、質斯、神經疾患、皮膚病に特効あり、湯治客絶えず。

福島鑛泉 婦負郡保内村福島に在り、八尾町より四町、自動車の便あり。

吹上鑛泉 東礪波郡南山見村今里に在り、井波町より近距離にして達す、癩瘡、質斯、消化不良、皮膚病に効あり。

鳥越鑛泉 東礪波郡東山見村金屋に在り、神經疾患、消化器病、生殖器病、皮膚病に効あり。

林道鑛泉 東礪波郡大鋸屋村林道に在り、城端町より約三十町にして達す、車馬の便あり、胃加答兒、婦人病、癩瘡、質斯等に効あり。

ラジウム泉 中越線城端驛より約二丁に近き東礪波郡城端町に在り、泉質は含鐵、炭酸鹽類泉に屬し、多量のラジウムイオンを含有す、消化器病、呼吸器病、婦人病等に特効あり、浴舎の構造客室の設備共に整頓し、遠近の浴客四時絶へず。

頭川冷鑛泉 西礪波郡國吉村頭川に在り、高岡市より約一里十町、自動車等の便あり、癩瘡、質斯、神經疾患、婦人病、皮膚病に特効あるを以て浴客常に多し。

西山園鑛泉 西礪波郡石動町今石動に在り、皮膚病、癩瘡、質斯、婦人病等に効あり。

須川鑛泉 西礪波郡子撫村宮須に在り、石動町の西北約三十町、人力車の便あり、神經痛、癩瘡、質斯、皮膚病、胃腸病に効あり。

法樂寺鑛泉 西礪波郡子撫村法樂寺に在り、石動町より西北廿町、人力車の便あり、肺患、胃腸病、婦人病に宜し。

安養寺鑛泉 西礪波郡藪波村安養寺に在り、津澤驛より二十町餘にして達す、人力車の便あり、消化器病、神經痛、神經衰弱等に宜し。

山岸鑛泉 西礪波郡西五位村土屋に在り、福岡驛より約十町にして達し、人力車等の便あり、呼吸器病、消化器病、皮膚病、婦人病に宜し。

西明寺鑛泉 西礪波郡五位山村西明寺に在り、福岡驛より約一里、人力車の便を有す、呼吸器病、神経痛、腎炎、皮膚病に効あり。

谷内鑛泉 西礪波郡赤丸村赤丸に在り、福岡驛より一里十町にして人力車の便を有す、胃腸病、呼吸器病、婦人病、腺病に効あり。

湯谷鑛泉 西礪波郡南蟹谷村湯谷に在り、福光町より一里二十八町にして乗合自動車の便あり、胃腸病、脚氣、疝氣、痲質斯に宜し。

第三節 海水浴場

東岩瀬海水浴場 富山市を距る北凡二里、上新川郡東岩瀬海濱に在りて、其の名夙に知られし所なるが、富岩鐵道の開通以來設備の完全と、交通の利便とにより、富山方面よりの浴客頗る多し。

濱黒崎海水浴場 上新川郡東岩瀬町の東端より、濱黒崎村字高來の東端に至る間、樹姿端整全く自然の發育を遂げ壯觀を極むる松並木ありて、風光明媚なるを以て夏季來浴する者多し。

打出濱海水浴場 婦負郡倉垣村打出濱は白砂連なる所に松籟濤聲相和して宛然仙寰に入るの感あるを以て、此の地海水浴場は隣地四方町の海水浴場と共に、越中鐵道の便を利し夏時來集する者多し。

島尾遊園 雨晴水見間、水見郡宮田村島尾の白砂青松の海岸にして、風光明媚眺望絶佳の地なり、海水浴場は鐵道省の經營する所にして運動器具等の設備あり、加ふるに夏季の海水浴場としては縣下に名高く觀光の客頗る多し。

第十九章 越中民謡

第一節 麥屋節の由來

今を去る七百餘年前、京都の高殿に上らふを侍らせ榮華全盛を極めたる平家は、木曾武者の爲に其の勢を失ひ、續て頼朝兄弟の爲に西海の藻屑と消へたりしが、當時之が郎黨中紋彌と言へる侍大將ありて、一族と共に遠く越中庄川の上流五ヶ山中に遁れ、麥を蒔き薪を伐り人目をさけて一時の安住を此の地に定めたりと云ふ、其の末裔こそ平村の起原として今に老小口耳に傳へられつゝあり。

其の昔平家にあらざれば人にあらずとまで勢を檀にせしが、遽かに樞花一朝の夢と化し往時を追懷しては轉た今昔の感に堪へず、自ら此の感情の逆りて一族の俚謡と化し、表情となりて残されたるは即ち麥屋節の唄と踊との濫觴なり、數ある落人の中に最も此の舞を能くしたるは平紋彌なるものにして後亦麥を蒔る唄となつて逐、麥屋節と稱するに至りしものなりと云ふ、此の唄は先年日本青年會館開館式に際し日本七大民謡の一として世に紹介されたり、左に歌詞二三を擧げん。

一、麥や菜種は二年で蒔るが

麻が蒔られよか半土用に

一、浪の屋島を遠く遁れ来て

薪蒔るてふ深山べに

一、烏帽子狩衣ぬぎうちすてゝ

今は越路の柚家かな

一、心淋しや落ち行く先は

河の鳴る瀬と鹿の聲

一、河の鳴る瀬に絹機たてゝ

浪に織らせて岩に着せよう

第二節 小原節の由來

小原節は今より凡そ百十餘年前文化九年の頃、越中八尾町に於ける遊藝の達人等申合せ「お笑ひ節」なる歌を新作して盛んに之を宣傳し、種々態々に滑稽なる扮装を凝らし、新作歌を謠ひながら町内を練り廻れり、然してその歌中「おわらひ」といふ語を挿みしが、後年「ひ」を省略して「おわら」と謠ふやうになりしといふ、又一説には此歌は豊年万作の意義を有し「大葉節」と稱するのであるとの説をな

すものあり、民謡は實に平民文學の粹をなすものにして、何れの農村に至るも盛んに唱和さるゝに至りしが、世の進むにつれ、昔のまゝの卑俗なるものは自然差控へられ、八尾町に於ても「おわら節」研究會なるものを組織し、歌詞歌調、舞踊の研究改善に努め、今や全國に於ける民謡中の名歌詞として世に宣傳せらるゝに至れり。

一、來る春風氷がとける

うれしやきまゝにオワラ開く梅

一、吳羽山から白帆が見ゆる

二つ三つ四つオワラ有磯海

一、奥山の瀧にうたれしあの岩でさへ

いつほれたともなくオワラ深くなる

一、企業するなら富山に限る

電気豊かてオワラ値が安い

一、川々で起す電気は二百萬馬力

ほんに富山はオワラ電気國

一、伏木港船の数ほどお蔵を建てゝ

すいたお方とおワラ暮したい

一、立山の雪の姿を眺むる主の

姿見惚れるオワラ胸のうち

一、立山の峯の上よりアノ眺むれば

富士や浅間やおワラ白馬山

一、冬の富山はスキーの名所

雪よ降れくくオワラ野に山に

一、花も咲き鳥も囀づる黒部の峽谷は

浮世離れたオワラ神秘境

一、黒部峽谷日本の名勝

山水秀でてオワラ湯が香る

一、龍宮の城と見まがふあの蜃気楼

主と二人でおワラ眺めたい

一、螢鳥賊見に乗らんせあなた

わたしや樽も漕ぐオワラ權も漕ぐ

一、お米本場の越中の國で

とれるお米はオワラ二百萬

一、オワラオワラは穂の出るお粟

お粟穂が出れやおワラ米が出る

一、元の神通の川底までも

都に變るオワラ都市計劃

一、富山薬は四海に賣れる

四百四病のオワラ根を刈りに

一、戀の病も治さは癒る

買ふて飲まんせオワラ賣薬を

一、越中産物数多いけれど

中で名高いものはお米に薬に電氣にオワラ織物よ

一、富山灣漁れる魚類は数多いけれど

多く漁れるはオワラ鱒鱒

第二十章 人物

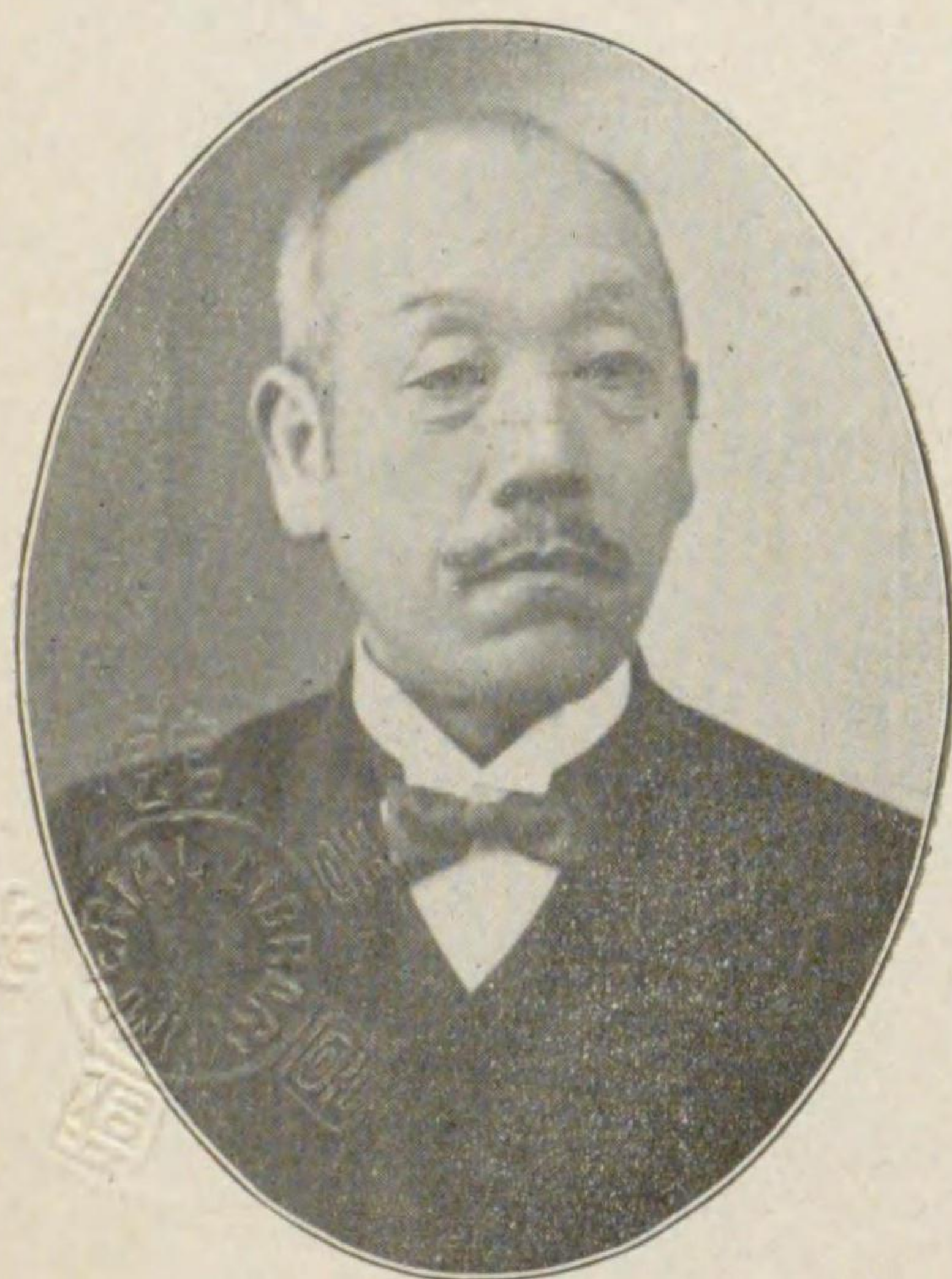
前田利次 富山藩祖にして前田利常の第二子なり、元和三年四月を以て生る、寛永十七年十月加賀藩より分封せられ從四位下に叙し侍從兼淡路守に任ぜらる、平素身を持すること端正、領内を治むること嚴肅、父利常の定めたる小松條目によりて各般の法制を定め、能く民情風俗を査覈し、藩治の基礎を確定するに至れり、延寶二年七月七日柳營に於て、俄かに發病し遂に卒去せらる、年五十八、大正六年十一月十七日朝廷其功を録し、正四位を追贈せらる。

前田正甫 富山第二代の藩主にして、利次の第二子なり、寛文三年十二月從五位下に叙し、同七年從四位下に進み大藏大輔となる、正甫大に文武を奨勵し、殖産興業に力を致し、苟も一藝に秀でたるものは、辭を盡して之を招聘せるを以て、多士濟々爲に藩治大に振作せり、又民衆の病苦を救濟するを念とし、藥業に心力を注ぎ嘗て備前片上の醫師萬代常閑の獻したる妙藥反魂丹等の方劑を富山の藥商に授け、命じて汎く諸國にこれを行商せしむ、是れ富山賣藥の始めにして、該業の今日あるは全く公の賜なり、寶永三年四月薨す、年五十八、明治四十二年九月十一日朝廷其功を録し、從三位を追贈せらる。

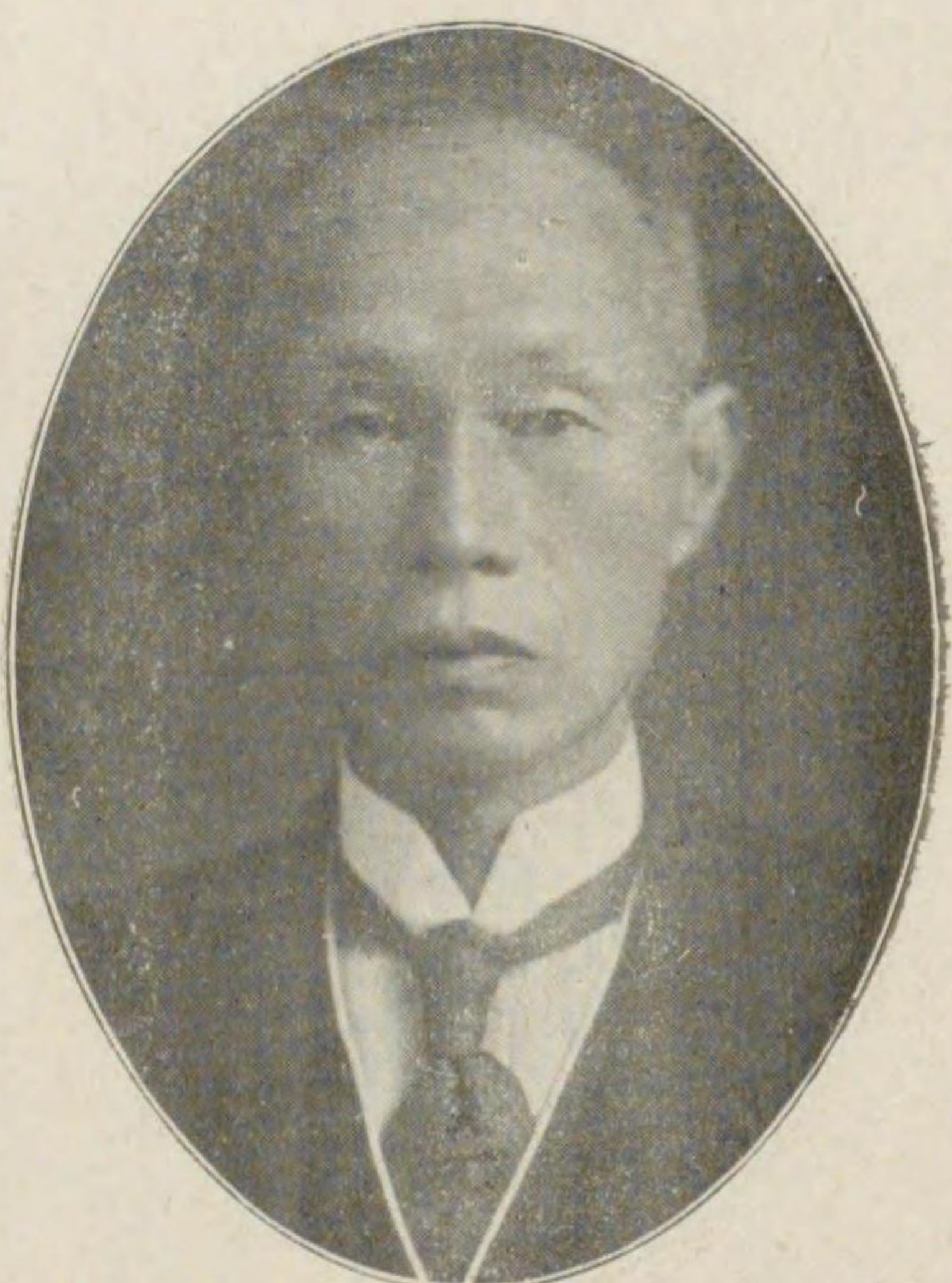
前田利幹 富山第九代の藩主にして、大聖寺藩主前田利道の第八子なり、享和元年從五位下に叙し、淡路守に任ぜられ、同三年從四位に叙せらる、利幹先づ藩學の規模を擴め、大に文武を奨勵し、又



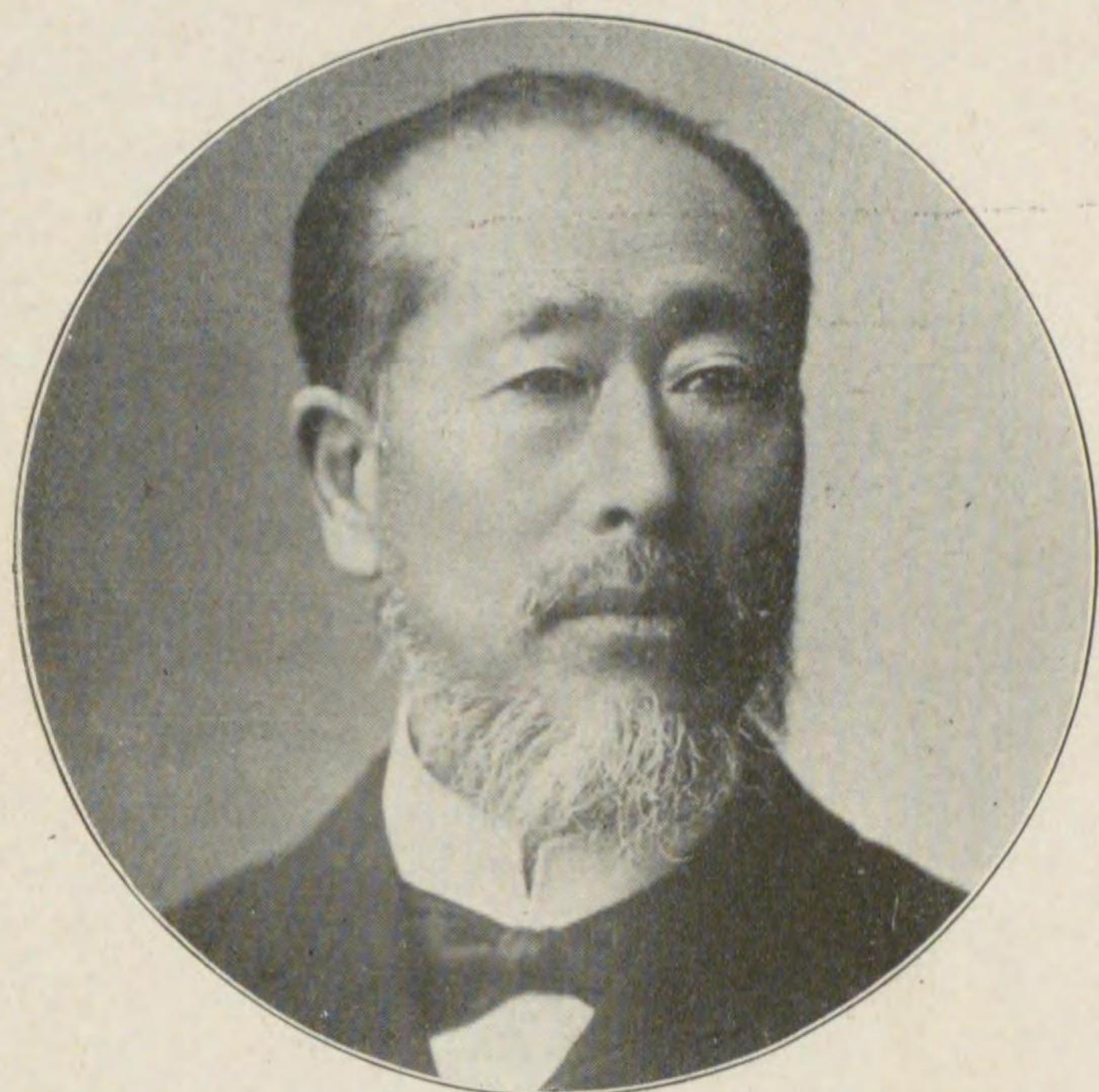
淺野總一郎



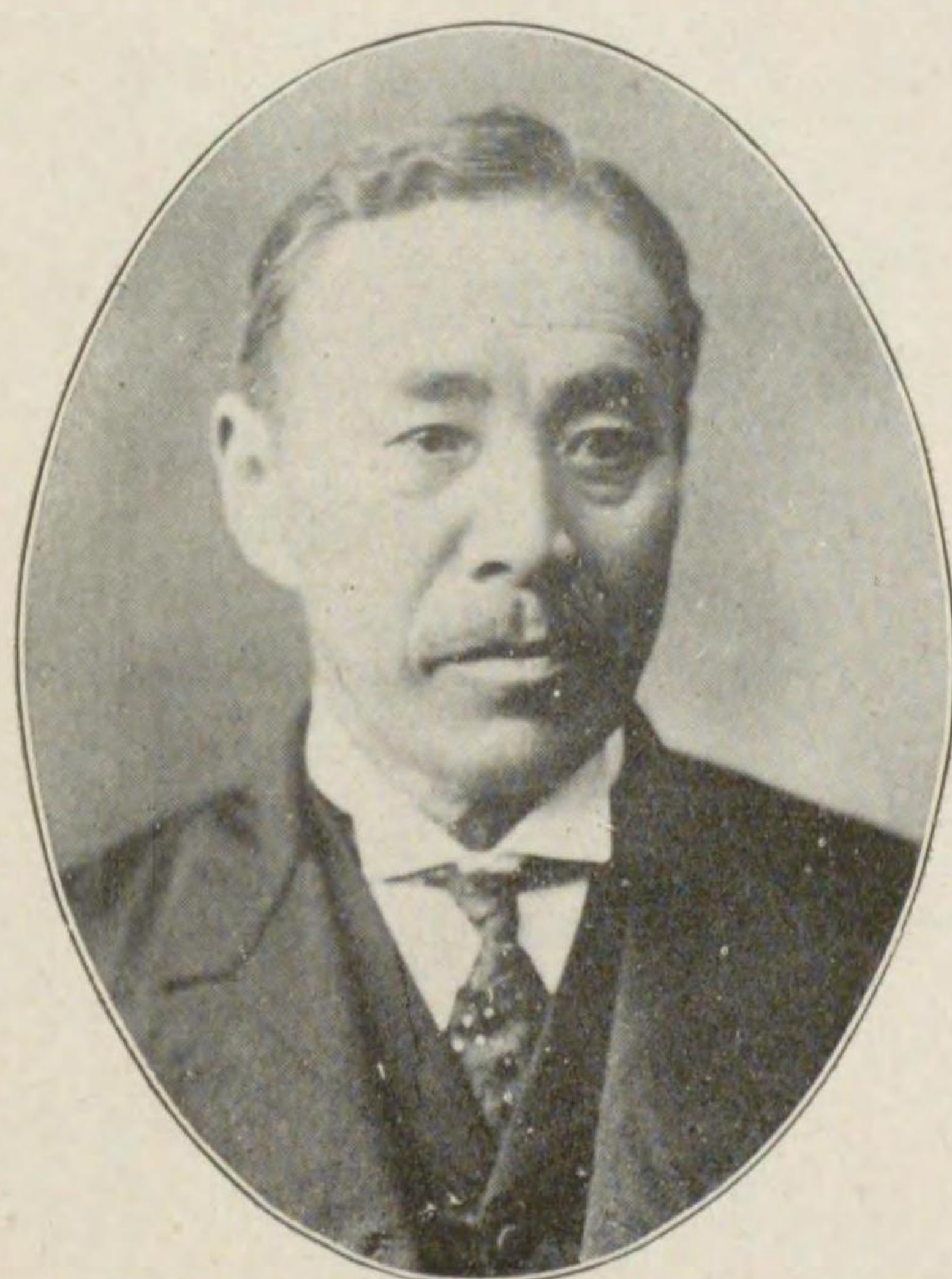
藤井能三



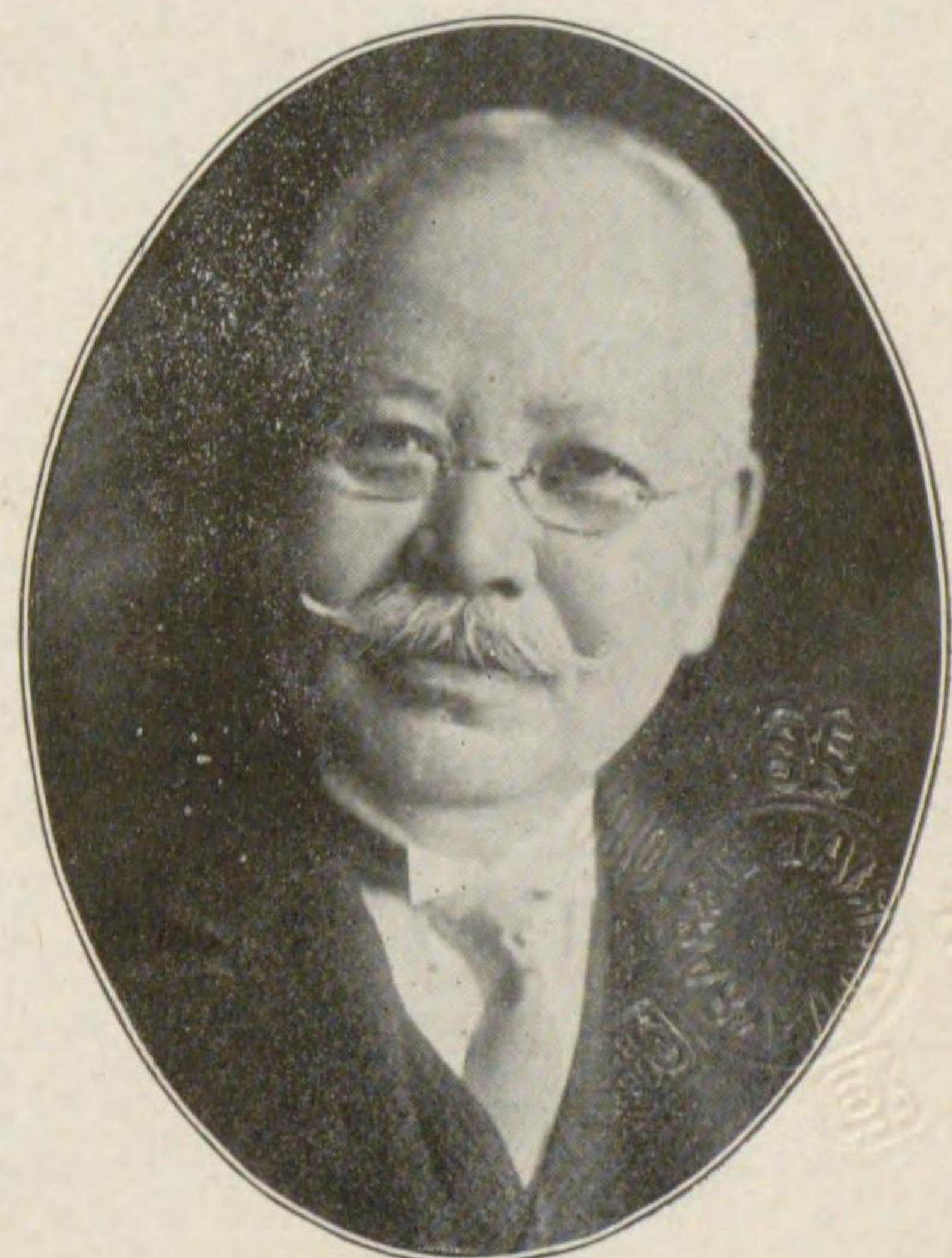
金岡又左衛門



安田善次郎



馬場道久



高峰謙吉

民間の情弊を矯め、舊制度の不備を改め、更に惠民倉を新設する等、社會事業に力を致し、其の功績大に他の稱揚する所となれり、天保七年七月廿日薨去す、年六十六、大正四年十一月十日朝廷其の功を録し、從三位を追贈せらる、その第二子利民は竹圃又は南蕪舎等の號あり、博物學に長じ、殊に禽鳥類の研鑽に没頭して造詣甚だ深く、後代を益する著書も少からず、明治四年正月歿す、年六十七。

前田利保 富山第十代の藩主にて利謙の第二子なり、寛政十四年十二月從五位下に叙し、出雲守に任ぜられ、文政七年十二月從四位に叙し、天保九年侍從に任ぜらる、利保學識宏博、歌學に通じ、本草に精しく、斯道の大家として推重せられ、又物産學にも造詣深く、其の治績も大いに觀るべきものあり、爲めに當時は學術文藝大いに振ひ、殖産興業亦着々其の効果を收む、その著書本草通串は稀觀の傑作にして、學界に珍重せらるゝも、殘存するもの少きは實に遺憾なり、又能樂にも精通し、その奥義を體得せられたりと稱す、安政六年八月十八日薨去す、年六十、明治四十二年九月十一日朝廷其の功を録し、從三位を追贈せらる。

三善爲康 射水郡本江村足洗の人、本姓は射水氏なり、治曆二年齡十八、京師に遊んで數學を算博士三善爲長に受け、又傍ら記傳學に長じて少内記に補せられ、勞に依りて叙爵せらる、後算博士に任じ、姓を三善と賜ひ、諸陵頭越前權介を兼ね、正五位下に昇れり、殊に壽齡を保ちて六朝に仕へ、八十四歳にして續千字文を撰びたり、保延五年八月四日、年九十一にて卒す、著す所、朝野群載、童蒙頌、韻懷中曆拾遺、往生傳、後拾遺、往生傳、世俗往生釋疑、金剛般若驗氣等あり。

宮崎定範 藤原魚名の後裔なり、祖父太郎は武勇を以て著はれ、八幡山に御所を營みて北陸宮

を迎へ大に庇護に力めたり、定範資性豪邁弱冠にして京師に出て、後鳥羽天皇に仕へ、常に勤王の大義を宣明せり、仲恭天皇の承久三年五月北條義時皇室を蔑如し、後鳥羽上皇の命を奉ぜざりし爲め上皇大に憤らせ給ひ、義時追討の院宣を五畿七道に下されしが、義時逆意を逞ふし十九万の大兵を以て京師を犯さんとし、北條朝時をして一軍を率ゐて北陸道を経て官軍に當らしむ、此の時、定範卒先義旗を擧げ、富樫等の兵二百餘騎を集め、親不知の嶮を扼せしが、朝時兵四万を以て來り攻む、定範極力拮抗奮闘したるも衆寡敵せず、宮崎城遂に陥落せしかば怨を呑んで加越の國境礪波山に退きこゝにて之を迎撃せんとせしも、賊軍勝に乗じて來り攻め、定範血戦利あらず、惜くも礪波山の露と消ゆ、大正六年其の勤王の功を賞せられ特に正五位を贈らる。

郷義弘 右馬允と稱す、下新川郡松倉村の人なり、後醍醐天皇の元應年中、相模鎌倉に至り、岡崎五郎正宗の弟子となり、鍛劍の奥義を極めしか、技大に進み、師正宗の地位を摩するに至り、聲譽大に揚り、その手になれる刀劍にはすべて銘を刻せず、正中二年僅に廿七歳にて病歿せり。

佐伯則重 嘉暦年間の刀匠なり、初め松倉の名工郷義弘の門に入り、後ち相模に至り、五郎正宗の門人となりしが、嶄然頭角を見はし、技倆優秀にして五郎三郎と併稱せらる、富山市五福兵營の近傍なる俗に鍛冶屋井と稱する處は則重居宅の跡なり。

僧祖淳 字は朴堂、姓蟻川氏、越中の人なり、一山派虛堂祖白の法嗣にして、始め信州慈壽諸山に住みしが、永享元年八月建仁寺に入り、第五百十三世となり、興雲庵に住む、後南禪寺に轉じて、第百八十二世の住持となる、晚年郷里越中吉祥寺に隠れ、應仁元年四月廿四日寂す、年八十七、祖淳書畫に巧なり、四十一歳の頃より専ら不動尊を描き眞に入る、我國不動を善くするもの前に弘法智證鳥羽僧正

慈聖の四大家あり、祖淳之を嗣ぐ又細字を能くし、瓜甲の上に般若心經一卷を寫せしといふ。

僧日隆 本門法華宗の開祖なり、元中二年十月十四日今の射水郡淺井村島にて生る、桃井直常の孫右馬頭尙儀の二男なり、幼名は長一鷹、剃髮して深圓又日隆と改む、京都妙顯寺の僧日露に師事し、師の歿後諸國を巡り、應永廿二年歸京して五條坊門に本應寺を建てしが、法論他と合はずして破却せらるゝに至り、河内攝津に移り又歸國して父母の菩提を弔ひ、東成寺後の本光寺を建てたり、同廿七年細川滿元の歸依を受け尼ヶ崎にて八幡宮の社地八町四方を寄進せられて、本興寺を建てたり、斯くて信者日に増し、永享五年女意王丸より京都六角大宮西坊門の地を寄進せられて、本應寺を再建するに至れり、本應寺は世に本能寺と稱するものなり、後に備後讚岐河内を巡化して至る處に寺を建て、晚年本興寺に退隱し、寛正五年二月廿五日示寂せり、年八十一、淺井村島の誕生寺は其の出生地なり。

阿曾三右衛門 越中の郷士阿曾孫八郎の後裔にして、慶長十六年今の東礪波郡野尻村本江にて生る、當時の庄川は郡の中部を貫流して、村邑の興廢常なく、地方市場の配置甚だ宜しきを得ざりしかば、藩に請ふて慶安二年野尻野に今の福野町を立て、同五年福光に新町を開き、萬治三年清水野に今の津澤町を立てるに至れり、出町は慶安二年に杉木村次郎兵衛等が出願して立てたる市場なるが、之も三右衛門の計畫與つて力ありしと云ふ、貞享四年九月十八日津澤にて歿す、年七十七、死後同地に供養碑を建つ。

柚田武右衛門 京都の青貝師なり、前田正甫武右衛門の青貝細工に精妙なるを聞き、延寶六年八月彼を聘して祿三十五俵を給し、藩の御細工方となし、子孫をして世々富山に永住せしむ、元祿十三年九月武右衛門は六十八歳を以て病歿せしが、其の作品中今に珍重せらるゝもの少からず、世に青貝細工と云へば先づ富山の柚田を推すに至る、武右衛門の弟彌兵衛、養子善兵衛亦名工を以て稱せられしが、其の子孫の中にも技倆の優秀のもの多く、柚田青貝の名聲は益々高く、歐米諸國にもその名を知らるゝに至れり。

浪化 應々山人、休々山人又は自遣堂と號す、東本願寺一如の末子にして、井波瑞泉寺の住職なり、德行高く且俳諧を好み芭蕉の門に入つて其の奥義を極む、元祿十六年十月九日示寂す、年卅二、著す所、名月集、有磯海磯波山玉まつり等あり。

安藤兵九郎 射水郡大白石村又太郎の二男にして、磯波郡宮丸村安藤次郎四郎の養子となれり、延寶元年射水郡二上村同新村守護町村同新村百橋村及磯波郡答野島村佐加野村大源寺村(以上八ヶ村)の荒地開拓を允され、自ら其の地に移住し、射水郡五十里村彦兵衛等と力を戮せて、天和元年より元祿年中までの間に、草高六百數十石の水田を開墾せり、これを上下兩村に分ち、磯波郡に屬するもの十四町六反餘歩を上八ヶ新村と名づけ、射水郡に屬するもの六十二町一反餘歩を下八ヶ新村と名づけ、惠を永世に貽せり、寶永五年下八ヶ新村に於て歿す。

藤井右門 享保五年射水郡小杉町に生る、幼名を吉太郎といひ、津幡江屋吉平の長男なり、十六歳の時出奔して京都に上り、富山藩主前田正甫の第六子前田利寛に知られ、其の養子と稱して藤井

大和守直義の養子となり、直明と稱し、從五位下に叙せらる、寶曆の變に際し右門年卅九、竹内式部に連座して罰せられ、位記を褫はれしが、脱走して郷里に潛み、遂に賣藥を行商して、諸國を巡り、山縣大貳と相知り、之を援けて大に勤王を説くや、議論激越、遂に幕府の忌憚に觸れて大貳及聽講者二百名と共に投獄の厄に遭ふ、時に明和三年にして右門四十七歳の時なり、翌年八月に至り大貳は斬られ、右門は梟せらる、屍体は知人等請ひ受けて淺草妙高寺に葬りたり、明治廿四年大貳と共に正四位を贈られ、同四十二年小杉町有志相謀り、碑を同町に建て、永く其餘光を後世に傳ふる事となせり。

宮永十左衛門 諱は正運、心外庵又桃岳と號す、享保十七年正月今の西磯波郡西野尻村下川崎にて生る、代々地方の豪農にして、加賀藩山廻役産物裁許等を勤む、十左衛門夙に殖産興業の必要を感じ、天明五年養蠶私記を著はし、同八年私家農業談六卷を公にし、以て世に益する所あり、又本草學に精しく、黃蓮甘草朝鮮人參の栽培を試み、更に凶年に備ふる爲荒年救食志を著はす等、救濟の道を怠らず、藩政に寄與して其の諮問に答へ、山川を跋涉して竹樹の調査をなし、地圖を製作する等、治績少からず、更に公務の餘暇、越の下草六卷、春の山路一卷を著はして、神社佛閣名所史蹟を闡明する等、社會風教に及ぼす所も亦多し、磯波地方産業の發達は十左衛門の獎勵に因由する所多く、その子孫に碩學輩出し、遂に勤王家贈從五位曾孫良藏を出せしもの氏の遺徳といふべし、著書養蠶私記は斯界の先見にして裨益する所多きを以て、本縣特に之を刊行せり、かくて享和三年六月十八日病歿せり、年七十二、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

僧洞水 新川郡新庄町黒川權吉の子なり、幼時禪門に入り、嶄然頭角を見はし、天明元年富山光嚴

寺廿六世の住職となる、博識高德、當時全國禪門の權威として敬重せらる。寛政三年隱退し江戸駒込吉祥寺に移れり、當時清朝に於て絶版となりし曹山録、洞水録等五種を寧波府の天童寺六合の長盧禪院に贈り、本朝に闕けたる曹山廣録等八種を得んと欲し、幕府の執政松平定信に事由を啓示せり。寛政五年其の允許を得て渡航を企て大に東洋佛教の興隆に資せんとせしが、故ありて素志を果さず、享和三年六月示寂す、年七十八、著作中五位顯訣元字脚は特に名あり。

伊東彦四郎

諱は祐壽、字は公眉、竹堂と號す、寶曆八年下新川郡泊町沼保にて生る、家代々十村

役を勤め彦四郎は公職五十年、御扶持人十村に進む、當時黒部川右岸雲雀野一帶の地は水利の便を缺き空しく畑作に甘んぜしが、彦四郎之を遺憾とし開墾を志せしも、用水を取入るべき黒部の溪谷は斷崖數里相連り開墾容易の業に非ず、依て屢加賀藩に懇請し、遂に資銀拾五萬兩を得て工事を起し、寛政八年には試掘をなし、同十年より享和二年に至る前後五年の歳月を費し、或は墜道を穿ち或は架橋を設け、遂に延長三里の水路を竣工して、舟見野墾田三百八十三町歩を得、更に餘水を以て養ふ所を合すれば五百七十九町歩に達するに至る、斯くて往時の曠野は萬頃の美田と化し農民蝟集するに至れるもの彦四郎努力の賜なり、當時測量器未だ備はらず、晝は菅笠を懸け夜は提灯を點じて目標となし、兩岸相呼應して位置を定めしといふ、以てその苦心を察すべきなり、後に室山開百二十餘町を得たるも彦四郎の功勞與つて力あり、天保五年四月十日病歿す、年七十七、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

石黒藤右衛門

諱は信由、幼名を與十郎といひ、後藤右衛門と改む、寶曆十年十一月十八日今の

射水郡作道村高木にて生る、幼時父を喪ひ祖父に養はる、性算學を好み、中田高寛の門に入りて研鑽すること十五年、其の蘊奥を極め、傍ら測量術にも精通せり、又城端の西村太仲に就き、天文曆學を修め、晩年には蘭學をも兼修せり、寶政四年以來藩命を奉じて加越能各地の測量に従ひ多くの製圖を成し、其後新田裁許を命ぜられ、後加越能略圖及村名簿三冊を製し、又檢田測地の事に従つて藩より屢々賞を受けたり、天保六年加越能三州測量圖籍を完成し、翌年十二月三日年七十七にて歿せり、門生多く著書亦少からず、大正六年十一月十七日從五位を贈らる。

澤田清兵衛

明和二年二月朔日、今の西礪波郡是戸村光明寺に生る、幼名は左知藏、祖先是甲斐

源氏の支流小笠原長清より出で、天正年間農に歸し、母の姓澤田を稱して二塚村に住せしが、子孫光明寺に移る、安永天明の頃庄川屢々汎濫して沿岸の被害頗る多し、村役人たる清兵衛は其の耕地の復舊に力を盡し、寛政五年より九年間不屈不撓の活動をなし、遂に水波兩郡に亘りて數百町歩の美田を拓き、更に水路を通じ、道路を設けて耕作の便を計れり、文政十二年十月廿六日病歿す、年六十六、近年村人靈祠を村内神明社境内に建て、川原宮と稱し、毎年忌日に之を祭る、大正十三年二月十一日從五位を贈らる。

西村太冲

諱は篤行、字は審之、金波又は得一館と號す、明和四年今の東礪波郡城端町にて生る

養谷長兵衛の子なり、性學を好み、十六、七歳の時天文学を修めんと欲し、上京して西村遠里の門に遊ぶ、遠里は寶曆四年の新曆を作りし當時の大家なり、天明七年遠里没して嗣なし、門弟胥謀り太冲を推して後となす、因りて西村氏を冒す、太冲既修の學尙意に滿たざる所あり、大阪に赴き更に麻田剛

立に就きて學ぶ、剛立は西洋曆學の先達にして門人多し、其中歲實消長法を傳へたるものは高橋至時、其の子景保、間重富及び太沖の四人のみ、高橋間の兩人は後に幕府天文方となれり、寛政十一年加賀藩主前田治脩、太沖を聘し、明倫堂の師となす、太沖任官の意なく之を辭せしが允されず、金澤に留りて毎歲金五兩を給せられ、文化四年醫員格となり、十五人扶持を與へらる、其の間に城中時鐘法を改め、金澤地圖を訂し、又北陸の氣象を觀測して略曆を作る、此の曆天保二年天覽を賜はりしかば、獻上氣朔曆と名づく、其の他天文に關する著述多く、近時譯して英國天文臺に送り、日本代表の著となす、門弟多く、贈從五位石黒信由は其一人なり、天保六年五月廿一日病歿す、年六十九、門人碑を野田山に建つ、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

大野拙齊

名は鼎、字は國寶、十郎と稱す、富山の賣藥業彌次兵衛の第十子なり、幼にして穎悟、書を妙傳、寺僧に學び、日夜精勵、學業大に進み、耆宿皆な歎賞惜かす、その將來を囑目せり、市河子靜、富山藩に招聘せられ、彼を一見するや、國の寶なりと推賞せり、拙齊後ち京師に出て、僧大典の門に學ぶ、年廿八時に始めて富山藩の儒官となり、文化二年六月役人組御近習並に昇進せり、同九年江戸に赴き、昌平校に入り、其の學識卓拔を以て當時の教官に敬重せらる、翌年富山に歸り、文政二年廣德館の祭酒に擧げられしが、同十三年五月二十日歿す、年五十九、長子介堂亦碩學にして、氣慨あり、天保六年廣德館祭酒となりしが、後ち國政に關し宗藩に上疏する所ありて、幽閉せられ、文久元年三月歿す、享年五十四。

青木北海

富山藩士青木平馬の嫡子なり、天明三年正月晦日を以て生る、通藩又市、神通海雲、墨

顛は皆な其號なり、北海幼より學を好み、易數に精しく、殊に書に巧みにして、二王に私淑し、別に一機軸を出し、大に識者に愛重せらる、北海人となり、思慮に富み、常に我邦に於て漢文を用ゆるは國體を瀆すの虞あり、宜しく漢文を廢して、假名交り文を用ふべしと主張し、又多趣にして、工藝に關し、意匠を凝らせることも多し、北海故ありて家を繼がず、常に江戸に在り、慶應元年六月十一日歿す、享年八十四、著書越中地志、周易外傳、神數大訓、神通文言歌集、松陰深處鈔等は世の推賞する所なり。

椎名道三

寛政二年三月今の中新川郡中加積村小林にて生る、十村役寶田某の二男にして、出で、椎名道山の養子となる、道山は松倉村大熊の名族にして、松倉城主の後裔なり、道三幼時神童の譽あり、長じて算數測量の術に精しく、加賀藩の命を奉じて三州至る處、用水路見立をなし、開墾を企て、新田十八ヶ所、千七十餘町歩、荒田五百餘町歩を墾くに至る、其中主なるものを室山開及び布施山開となす、室山開は東加積に在り、文化三年加賀人某之を企てしが、九歳業成らず、道三之を繼ぎ、水路を改め、新田草高千六十石、荒田七百石を得たり、布施山開は大布施に在り、文政三年開墾見立をなし、天保八年黒部川左岸内山村にて取入口を設け、宮野開草高三千五百石を得、同十年より更に十二貫野開凡五千石の地を拓き、四年にして功成る、其工事頗る難澁にして、絶壁を穿ち、幽谷に架し、辛酸を嘗め盡して七里の長程を竣工せしもの、全く道三の努力による、藩その功を賞して、永代給米を與ふ氏の開通せる水路は何れも道三用水と稱し、每春通水に際し、各戸之を汲みて、神佛に供し、感謝の意を表せりといふ、以て遺徳の大なるを知るに足る、道三新田裁許より、平十村列に進み、安政五年五月五日病歿す、年六十九。

僧萬馨 名は顯道、阿隆、遂と號し、寛政二年今の射水郡新湊町荒屋に生る。米田理左衛門の弟なり。幼時、大樂寺にて剃髮し、後京師に遊び、文化三年三河大樹寺に入りて隆也和尙につき教を究め、幾くもなく鴻巣勝願寺芝増上寺の住職となれり。學徳兼備、名聲噴々、嘉永二年竟に大僧正に進み、淨土宗總本山京都智恩院第七十一世の住職となり、萬譽上人と稱す。安政五年五月十二日入寂せり。年六十九。

梶野彦八 婦負郡四方町の人なり。同町は古來漁業地にして、富山城下へ日々鮮魚を行商して、各自の生計を營む者多かりしが、寛政年中富山藩、その行商を禁じ、魚類は富山の問屋に集めて販賣することとなりし爲め、利益は總て問屋に壟斷せられ、四方町の漁民大に窮迫に陥りたり。同町の總代は之を憂ひ、當時の郡奉行湯原某に對し、屢々其の禁を解かれんことを歎願したるも頑として聞かず。彦八資性義俠、此慘狀を見るに忍びず、挺身千石町なる郡奉行の邸に至り、具さに事情を述べて、解禁を求めしが、湯原は更に顧みる所なく却つて彦八を蹴り、横暴を極めしかば、彦八大に憤慨し、遂に其の立關にて屠腹せり。時に年四十五。文化三年藩主其の義烈に感じ、湯原の職を免じ、問屋の專賣を廢止し、行商を自由にせり。町民蘇生の思をなし、其の堵に安んずるを得しかば、祠を建て、之を祀れり。

五十嵐篤好 通稱小豊次、後に孫作といひ、雉岡、臥牛、齊等の號あり。寛政五年十二月今の西礪波郡東五位村内島に生る。家代々地方の豪農にして、加賀藩十村役を務め、篤好に至り、無組御扶持人十村に進む。性學を好み、算術を石黒信由に、國學を富士谷御杖に、歌道を本居太平に學び、造詣頗る深く

識見高遠、他に附和せず。書道亦一家をなす。其の職を奉ずるや、或は藩政に參與して諮問に答へ、或は農政に關する書を公にして、世を導き、又到る處用水を通じ、美田を拓く等、治績頗る多し。特に上新川郡船崎村舟倉新等十一ヶ村三百八町歩の新開は、最顯著なるものにして、住民その遺徳を頌し、碑を建て、之を祀れり。又孝子を推獎し、三州孝子傳を著す等、地方風教を振作する所も亦多し。文久元年正月廿四日金澤にて客死す。年六十九。著書頗る多く、天朝墨談、新器測量法、郷莊考、納税に關する五考、歌學三訓、神典秘解、湯津爪、櫛、雉岡隨筆等、其主なるものなり。昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

村田誠齋 名は行、字は士文、一の字は順道。誠齋は其の號なり。寛政六年礪波郡井波町に生る。父を徳兵衛といふ。誠齋醫に志して、京師に出て、吉益北洲に就て苦學し、傷寒論本義二卷を著し、室町にて多くの生徒を教育せり。嘉永五年門人を從へ、高岡に遊び、轉じて奥羽の諸州を経て、江戸に入り、安政五年再び京都に歸つて、勸修寺法親王の侍醫となり、法橋に叙せられしが、同年十一月廿四日風を病んで歿す。年六十四。門弟七百餘人、著書若干あり。

齊藤彌九郎 名は善道、字は忠卿。彌九郎は其の通稱にして、晩年篤信齋と號す。寛政十年正月十三日水見郡佛生寺村に生る。其の先、藤原魚名より出て、郷間に名望あり。十歳家を辭して、江戸に至り、岡田十松に就きて劍を學び、後古賀精里に經義を受け、平山子龍にも擊劍を學び、廿年の苦を積めり。葦山の名代官江川英龍と舊誼あり、之を援けて、練兵館を建て、志士を養成せり。時に彌九郎年僅かに廿八。武田彦九郎、藤田虎之助等來り集まり、殊に木戸孝允に推重せられ、門下に武技の優秀者を輩出せしめたり。當時屢々幕吏の爲めに忌疑せられ、彌九郎意に免れざるを覺悟し、訣飲徹宵以て死を待

つもの前後六回に及べりと云ふ、明治戊辰の變勤王の大義を重んじて徳川家の恭順謹慎に左祖し彰義隊等の暴舉を排斥して大に達識の志士に崇敬せらる、維新後會計官、權判事、鑛山大佑等に任せられしが、明治四年十月廿四日卒去す、享年七十四、彌九郎五男あり、四男新太郎は東京府士族に列せらる、彌九郎容貌魁偉、天資慧明、孝友、門弟に接すること嚴格、業を授けて倦まず、木戸孝允、山尾庸三、邊昇等は皆其の高足なり、明治四十年五月廿七日その忠誠天聽に達し、特旨を以て從四位を贈らる

淺野五助

名は清弘、富山藩士、淺野十兵衛の三男なり、人となり豪邁、沈毅、擊劍に長じ、其師齊藤善右衛門より奥義を皆傳せらる、享和三年正月藩主前田利幹之を録して手廻組雇となし、稽古所三ヶ所の師範を命ぜられしが、其教養宜しきを得、聲譽大に舉れり、後江戸に出て、當時知名の師範に就きて修練を積み、技大に進みしかば、各藩より歎賞せらる、歸藩の後、文化九年三月、十人扶持組入を命ぜられ、門下を集るもの日々に増加し、一藩斯道の重鎮として知られしが、文政十年四月病歿せり、長子五兵衛亦父につぎて劍道、槍術等に長じ、令名あり、明治三年六月五十五歳にして病歿せり、

僧宣明

眞宗大谷派の講師なり、十八歳の時上京して高倉寮に學び、奈良初瀬の寺々を遊歴して、碩學を訪ひ、俱舍唯識維摩變の諸經を學び、就中俱舍論の蘊奧を極めて名あり、俗に俱舍宣明と稱せらる、學成りて大學寮に開講し、擬講及嗣講を経て遂に講師に進み、高岡開正寺の住持となる、文政四年五月十七日七十二歳を以て入寂せり、著書多く、門下を集る弟子二千餘人に及ぶ、以てその學殖を知るに足る。

黒川良安

中新川郡山加積村黒川の人なり、始め彌靜淵と號し、晩年に至り自然と改む、父玄龍



前田正甫



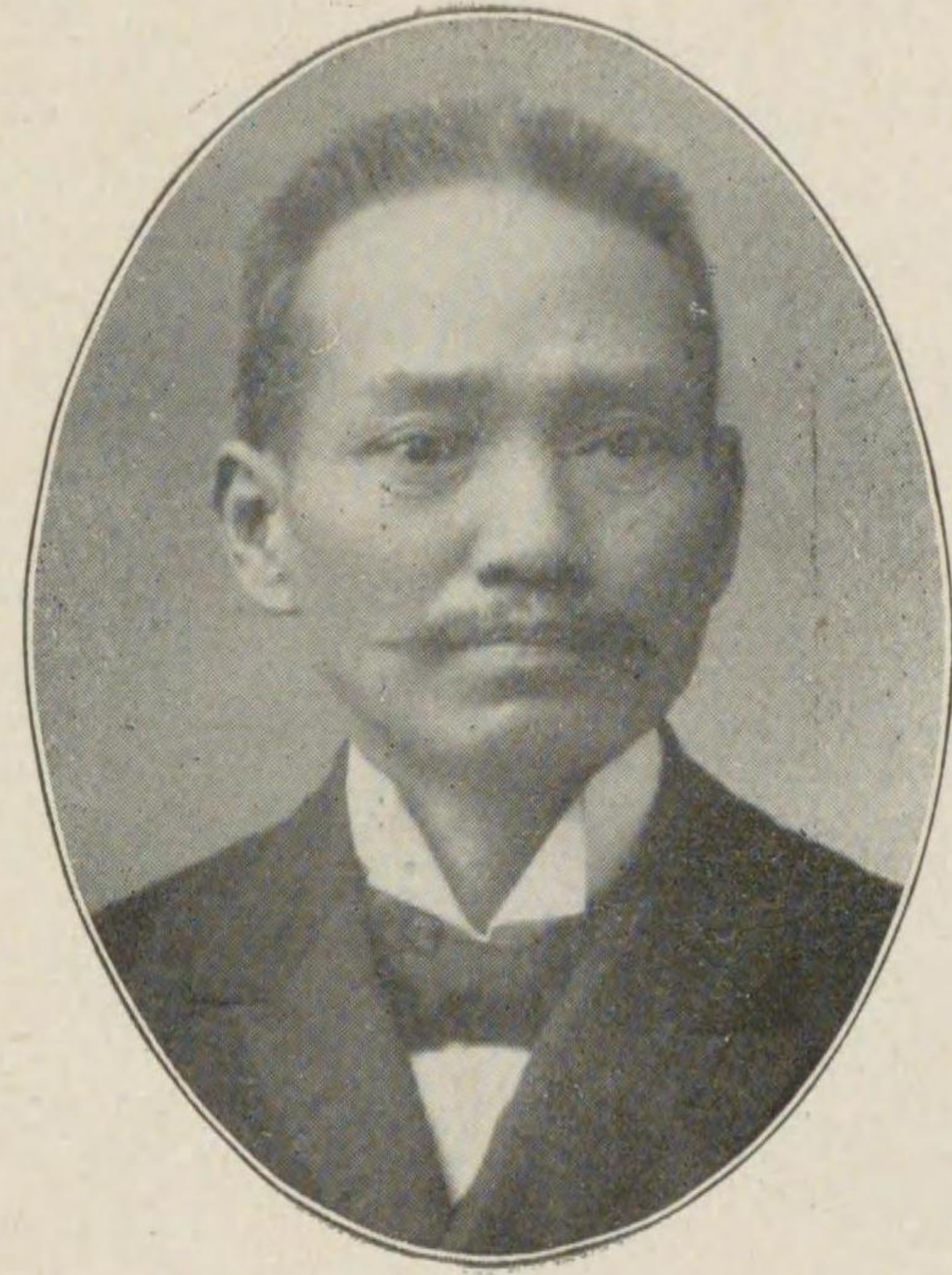
岡田陽



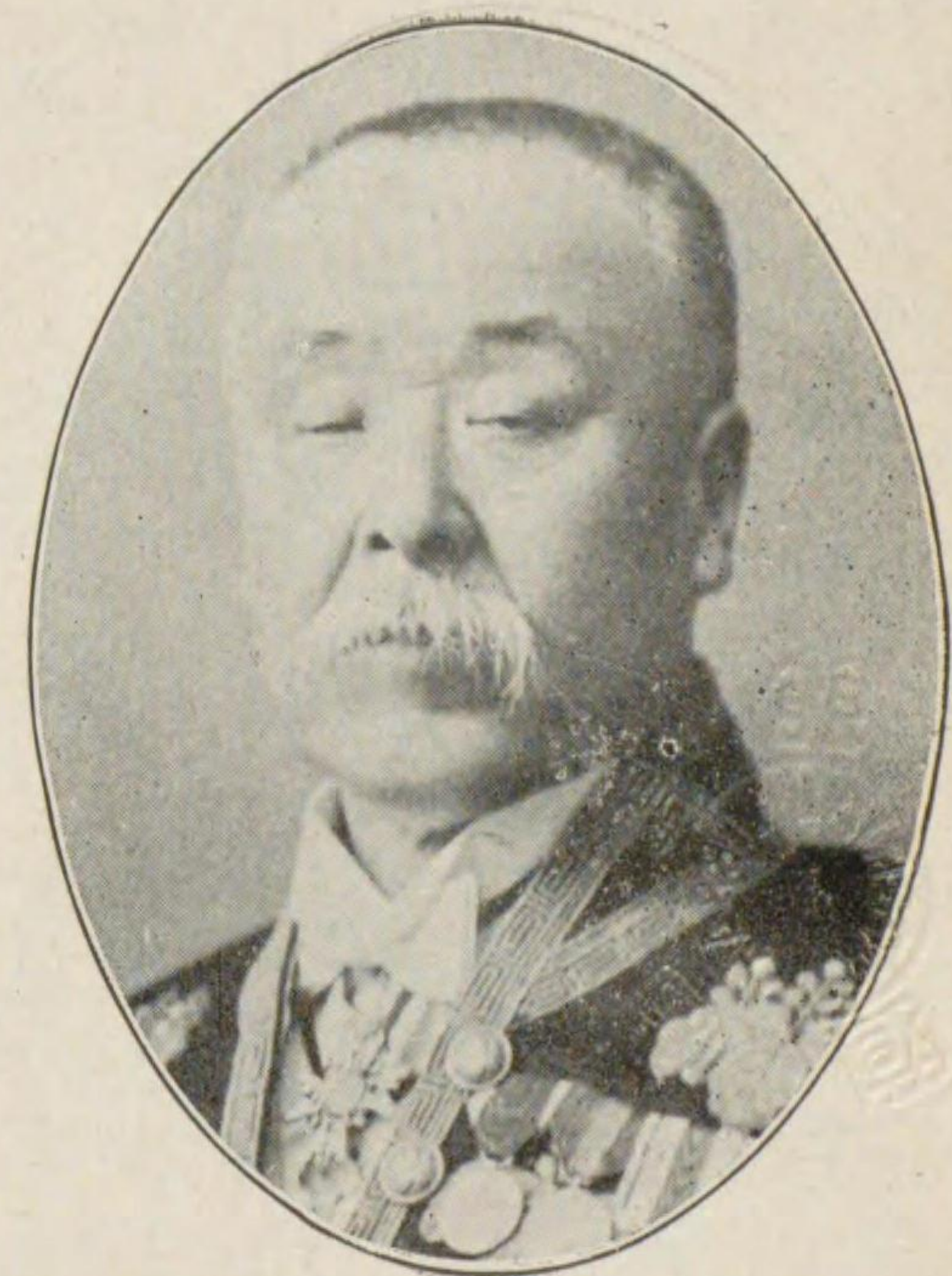
杏凡山



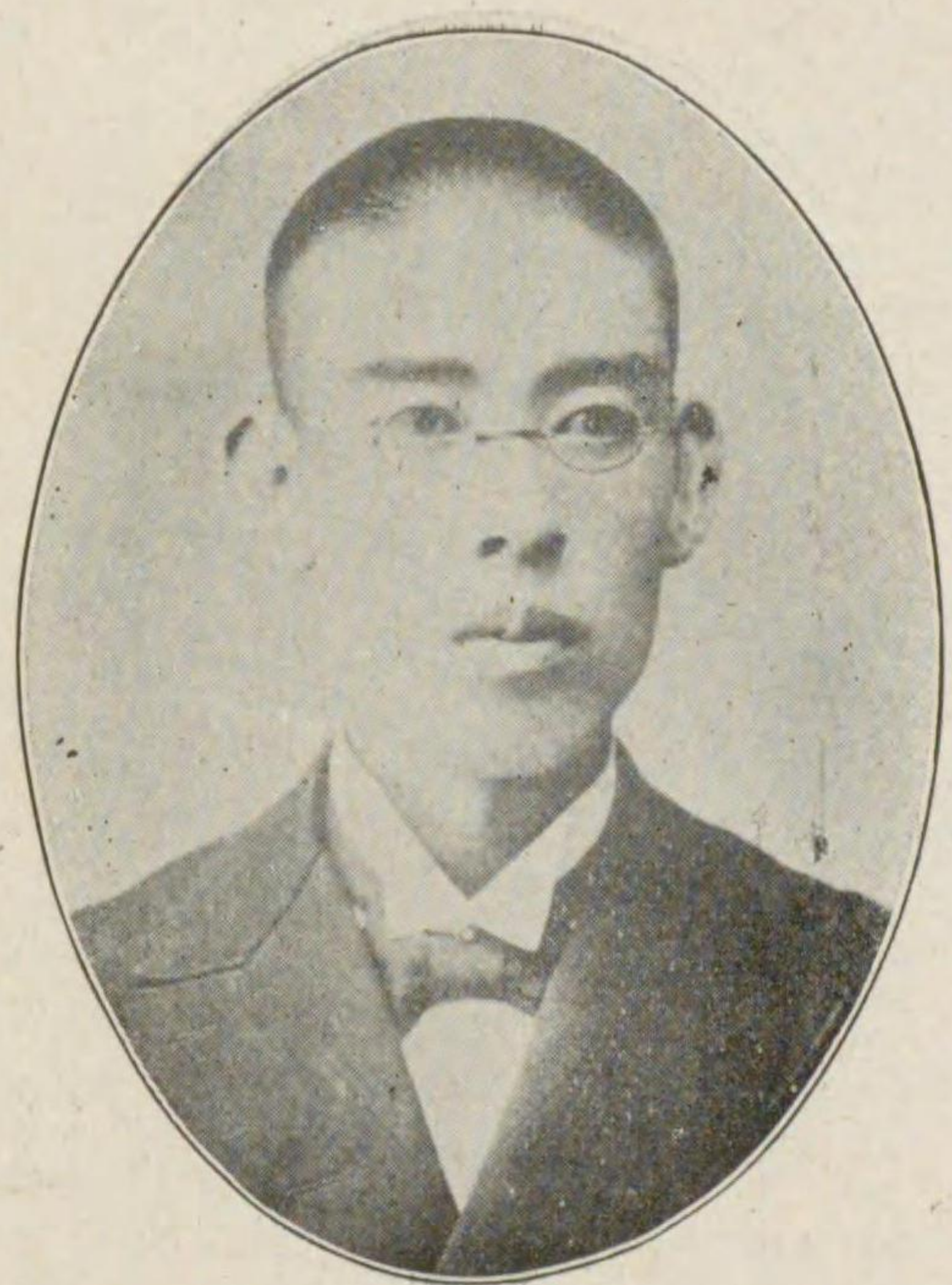
示垣稻



之孝田島



郎四部磯



丸義江蟬

は醫を業とし志を立て、長崎に遊べり、良安時に年十二、父と共に彼地に至り蘭學を修め、父歸郷の後も長く其の地に止まり業益々進む、天保の末四方に周遊し、吉田松蔭、梁川星巖、高島秋帆等と交り、途次浪華に於て疫に罹り、緒方洪庵に治を乞ひ平癒せり、後洪庵の紹介にて江戸、坪井信道の知遇を受け、又佐久間象山とも盟交し相擁して時事を談せり、弘化三年良安甫めて金澤に赴き、醫業を開きしが、治を乞ふもの門に滿ち、笈を負ふて來り學ぶもの亦頗る多し、此歳、佐久間象山書を寄せて幕府に仕へんことを勧めしが、藩主前田齊泰之を聞き擢んで、侍醫となし、録八十石を給す、安政元年加賀藩壯猶館を創立し、良安に命じて蘭學及び兵學を教授せしむ、同三年良安は種痘術を施せしが、是れ北陸に於ける種痘の嚆矢なり、同四年幕府藩書取調所を設くるや、良安は其の助手に擧げらる、明治元年正月藩命を奉じて再び長崎に赴き、同二年歸藩するや、金澤病院及び金澤醫學館を設け、醫風更に振起し、良安の聲譽益々著はる、明治七年男誠一郎歸朝し、官途に就くや、良安業を廢し門を杜ちて讀書に耽り、後ち東京に移り、醫學の研究に熱中せしが、明治廿三年九月廿八日、七十四歳の高齡を以て逝去せり、良安天資聰明、父母に事へて孝養至らざるなし、明治四十二年九月十一日、良安の偉功を録せられ、特旨を以て正五位を贈らる。

杏凡山 富山藩士にて通稱敏次郎、名は立、字は士立と稱す、夙に昌平校に入り、林述齋、鹽谷宕陰に學び、經學に精通せり、藩主前田利同の時、廣徳館の祭酒となり、大に學政を釐革し、四書五經の訓點を改訂し、又其意見を記して出版せり、後宗藩明倫堂の教官に聘せられしが、明治十六年の頃、富山に復歸し、千石町に家塾を開き、門人頗る多かりき、明治十八年五月十九日病歿す、年六十六、凡山資性謹嚴

にして感慨あり、其詩文を蒐めたる凡山遺稿あり。

坪井信良 醫師佐渡養順の二男なり、文政六年三月高岡利屋町に生る、幼名を末三郎といひ、後良益又信良と改む、十八歳にして京阪に遊び、家兄と共に小石元瑞に醫業を受く、廿一歳江戸に赴き、坪井信道の門に入り、蘭學を修む、信道其有爲の才を愛し配するに、其長女を以てす、廿六歳養父歿せしかば、其家業を繼ぎ、後越前侯松平春嶽の侍醫となること十年、辭して開成所に出仕し、著譯に従ひ、元治元年幕府の奧醫師に聘せられ、録二百石を受け、從五位に准し、法眼に列せらる、明治維新後、靜岡病院副院長、東京府病院長に轉ぜしが、退隱の後、専ら著述を事とし、譯書卅餘種の多きに及び、同卅七年十一月九日、年八十二にて病歿せり。

岡田吳陽 小西有斐の第二子なり、文政八年七月十八日を以て生る、通稱順二、名は信之、字は君行といふ、資性寛冲夷曠物と抵るゝことなく、徳望頗る高く、世の信用極めて深し、出でて藩の碩儒岡田栗園の家を繼ぎ、年十九にして笈を負ふて江戸に出て、昌平校に入學せり、後歸りて、表扈從近習頭等を勤め、又廣徳館文學に任ぜられ、藩主の師範を兼ね、藩制改革に關し意見を開陳して貢獻する所多し、大政維新後は専ら力を家塾學聚舎に致し、子弟を教へ諄々として倦まず、その陶冶を受けたるもの擧げて數へ難く、知名の士亦頗る多し、明治十八年六月廿九日病歿す、年六十一、吳陽詩文を能くし、又書道に精通し、篆隸諸體備はらざるなく、特に行草に妙を得たり。

木村雅經 立嶽と號す、文政八年富山に生る、幼より畫を好み、十二歳の時江戸の繪所に入學し、狩野伊川、勝川晴川法眼に就き苦學すること三十餘年、芳崖雅邦と並ひ稱せらる、藩廳及幕府の兩本

丸御用を勤めしが、維新後、圖書局勸農局を始め、新皇居、東宮御所の繪畫に力を盡し、又全国各地の山水を歴遊し、大に得る所あり、畫風は宋元明の粹を取り、特に一派をなせり、米國人にして其門に遊ぶ者あり、以てその畫風を想望するに足る、明治廿三年七月九日歿す、年六十四。

逸見又一 字は有秋、方圓と號し、始め文九郎と稱す、文政八年八月高岡に生る、九歳にして母に訣れ、十七歳にして父を喪ひ、後専ら祖父母に仕へて孝養を盡し、長ずるに及びて、京都に遊び、天下の志士と交はり、賴鴨、涯東、條琴臺、小川靖齋等と親交あり、業成りて郷に歸り、醫を業とせしが、幕末國家多事の際、又一は靖齋と共に常に加賀藩の方針定らざるを慨し、元治元年京師蛤御門の戰塵將に起らんとするや、藩の世子の大義を過らんことを恐れ、靖齋は禁を犯して之に説き、爲に罪を得て獄に下され、又一も亦之に連座せり、當時赤痢大に流行し、又一の妻之が爲に死し、五兒亦病床に呻吟して悲惨極まりなし、糺問三月の後、靖齋は斬られ、又一は纔に免かる、爾來藩の子弟を集めて漢學を教示し、悠々自適せり、明治八年八月卅一日、年五十二にて病歿す、大正十四年八月廿一日、從五位を贈らる。

加藤謙二郎 天保二年下新川郡泊町に生る、弘化四年十七歳の時江戸に出て、井上文雄の門に入り、國史を修む、同六年米艦來航、國論沸騰するや、謙二郎尊攘論を主張して、師井上に破門せられ、一時郷里に歸りしが、安政四年再び京師に遊び、山崎學派の中、了三の門に入り、經學を修め、常に大義名分の説を唱へ、木戸孝允、梅田雲濱、賴三樹三郎等と交り、屢々危地を踏めり、元治元年七月、長藩の福原等兵を率ゐて京師に入るや、謙二郎之に加はりし爲、加賀侯の怒りに觸れ、將に捕へられんとせしが、了三の庇護により、大和の十津川に遁る、程なく謙二郎は十津川の郷校文武館の教授となり、大い

に報國の志氣を鼓舞し、又脱藩志士田中光顯片岡利和等を援助せり、更に十津川産出の木材販賣に託して薩長と氣脈を通じ、又硝石を製造し、糧米を配置し、加賀の藩論を一定し、薩長と共に機に臨み相呼應して王政復古の鴻業を成さんことに苦心せり、然るに謙二郎當時の急進派と相容れず、慶應三年三月八日急進派の沖垣等謙二郎を以て徒らに義舉の機を失するものとなし、文武館に至り、先生は佐幕派たる加賀藩の密偵なり」と誣ゆ、謙二郎大に之を憤り、沖垣等の無謀を歎ち、翌九日遂に自殺せり、時に年漸く三十七、大正四年十一月十日朝廷其の丹心苦節を録し、從五位を贈らる。

宮永良藏 幼名は龍之助、後、正純と改む、天保四年正月廿五日今の西礪波郡西野尻村下川崎に生る、父を東作といひ醫を業とす、良藏十四歳の時父を喪ひ、母に従つて其實家福光町石崎氏に養はる、十八歳醫を志して上京し、苦學八年、後業成つて同地に開業し、次て母を迎へしが、當時内外多事憂國の士は何れも國事に身を投ぜり、良藏は徳大寺郷の知遇を受け、家業を棄て、東西に奔走せしが、慶應三年遂に幕吏の知る所となり、新撰組の爲に捕へられ、西本願寺の陣營にて嚴しき糾問を受けしも更に言はず、皮肉爛れるに及び漸く宿下げとなり、同年十二月廿二日遂に歿せり、年三十五、明治二年三月東山靈山招魂所に祀られ、同廿四年九月更に靖國神社に合祀せられしが、同四十年五月廿七日從五位を贈られたり。

僧日阜 字は秀泰、春應院と號す、本姓中田氏、天保七年五月今の上新川郡堀川町上本郷に生る、九歳の時富山大法寺にて薙髮し、後各所に轉住せしが、遂に法華宗本山身延山久遠寺第七十六世の法燈を嗣ぐ、先師の遺命により大學院を新設し、大に宗學振興に努力せり、明治二十六年八月二十六日

寂す、年五十七。

島巖 幼名を助八と稱す、天保九年今の東礪波郡東般若村權正寺に生る、家代々十村役を勤む、明治維新後農事教育の必要を唱へ、率先桑茶の栽培を試み、以て衆を勵し、又地方學校の創立に盡力せり、明治十二年四月石川縣會議員に選ばれ、論議公正、衆の傾聽する所となりしが、同年八月偶々流疫に犯され、九月四日遂に歿す、時に年四十二、その起つ能はざるを知るや、遺書を認め、死後、縣に上申せしむ、縣令之を披閱すれば、遺産を以て一農學校を創設せられたしとの趣旨を記せり、是全く遺族の知らざる所なり、同十六年富山縣分置の後、遺族其の志を繼ぎ、金八百圓を縣に寄附したり、明治廿七年縣農學校を福野に設くるに當り、その元利千餘圓を以て敷地を購入せり、明治の初年かゝる篤志の行爲は稀有に屬す、今農學校に碑を建て、その遺徳を永く後世に傳へたり。

安田善次郎 富山藩士安田善悅の長男なり、幼名を岩次郎と稱し、天保九年十月九日を以て生る、安政元年志を立て、江戸に出て、元治元年日本橋小舟町に安田商店を開き、兩替業を営めり、明治九年第三銀行を建て、其の頭取となり、同十三年安田商店を安田銀行と改めたり、同十六年日本銀行監事に任ぜられ、實業界の重鎮として名望頗る高く、爾來各銀行會社との關係益々多く、其の經營宜しきを得、事業大に擧り、富巨萬を重ねるに至り、財界の巨星として重んぜらる、多年公共事業に貢獻せしかば、功により特に勳二等に叙せられしが、大正十年九月二十八日不幸刺客の爲に戕害せらる、享年八十四。

馬場道久 弘化三年十一月廿三日、上新川郡東岩瀬町に生る、幼名は吉次郎といふ、家代々道正

屋と稱へ海運を業とせしが、道久朴直にして、勤儉拮据、勉勵益々その業を擴張せしかば、家運次第に勃興して遂に縣下多額納税者の首位を占むるに至れり、明治廿三年三月海防費獻納の功により、銀製黃綬褒章を賜はり、特旨を以て從七位に叙せられ、同年九月貴族院議員に選ばる、居常君國に奉ずる念厚く、恩賜財團濟生會、日本赤十字社等國家的の事業に對しては常に資を投じて吝まず、日清日露兩戰役に際し、自ら進んで其の所有船舶を軍用に供し、褒狀を授けられしが如きは特筆すべきこととす、大正五年五月廿日病を以て歿す、享年七十一、今は孫正治、七世の家督を繼ぐ、親權者母はる先考の遺訓に鑑み、大正十二年五月 攝政宮殿下の御慶事記念事業として金壹百參拾餘萬圓を本縣に寄附し、七年制高等學校建設費に資したる事は實に近來稀に見る美舉と云ふべきなり、昭和三年十一月御即位大禮に際し、はる女從六位に叙せらる。

藤井能三 弘化三年九月、射水郡伏木町に生る、船問屋三右衛門の子なり、從來伏木海岸は風濤の爲め浸蝕甚しく、年々桑田變じて海となる慘狀を呈せしが、天保十三年父三右衛門は藩に獻金して波除普請を起し、拮据廿七年を費したり、能三その遺業をつぎ、明治四年之を完成せし爲め、伏木海岸は安定となり、新地五町餘歩を得たり、又父祖以來藩の財務御用を勤め、維新後も地方經濟界の巨頭として爲替會社總頭取となり、第十二國立銀行、富山縣農工銀行の取締役を勤め、金澤高岡の兩米商會所を創立せり、明治五年學制頒布に際し、卒先之を奉體し、校費一切を自辨し、自己持家を校舎に充て、六年二月開校せり、是本縣下に於ける小學校の嚆矢なり、其の他水波兩郡の學校建設に盡力する等、地方教育に貢獻せしこと尠からず、又地方の發展は交通運輸の便を計るを急務なりとし、明治

八年三菱會社に交渉して、汽船の廻航を約し、十年には伏木共有燈臺を設け、十一年には伏木電信局の設立を請ひ、十六年には伏木私立測候所を建て、以て航海に便したり、更に加越の國境俱利加羅峠の嶮岨を慮りて、同十一年天田越新道を開鑿し、明治大帝御巡幸の便を計り、親不知の嶮は改修困難たるを察し、同十四年北陸通船會社を新設して、伏木直江津間の航路を開き、同廿六年には中越鐵道株式會社の成立に従ひたり、其の他明治十二年には石川縣會議員に選ばれて、地方行政に參與し、同卅二年には庄川改修の必要を唱へて治水の功を收め、更に救濟賑恤の爲め義捐せること前後十數回に及ぶ、斯く多年公益の爲め奮勵せる旨上聞に達し、明治二十七年二月藍綬褒章を授けられたり、大正二年四月廿日病歿す、年六十八、地方其の遺德を追慕し、伏木小學校庭に銅像を建て、以て之を表彰せり。

稻垣示 嘉永元年八月廿日今の射水郡二口村棚田に生る、豪農又兵衛の長男なり、文久年中加賀藩に於て、村々より壯丁を募り、洋式の教練をなすに方り、之に應じて射水大隊指揮長となれり、後高岡、野上文山の塾に學び、又小學教育にも從事せり、其の後身を自由黨に投じ、明治十三年八月北立社なる政社を創め、同年十一月越中人四千九百七十九名の總代として太政官に國會の開設を請願し、同十四年縣會議員となり、同十五年北立自由黨を組織し、金澤にて新聞を發行して、縣民の政治思想を鼓吹し、富山高岡にも政社を設け、其の間寢食を忘れて主義の爲に盡力せり、同年九月石川縣令を縣會にて攻撃せし爲、罰を受け、同十八年一月朝鮮事件發覺して獄に投ぜられしが、同廿二年憲法發布の大典に特赦せられて出獄せり、爾後大同團結に加はり、國民自由黨を組織し、政友會起るに及ん

て之に加はり、前後四回衆議院議員に當選せしが、同卅五年八月の選舉に際し自ら候補者となり、運動中偶々病にかゝり俄に歿す、年五十五、大正に至り、知人相謀りて高岡公園内に銅像を建て、その功勞を表彰せり。

淺野總一郎 嘉永元年三月十日水見郡藪田村に生る、醫師泰順の子なり、幼時泰治郎と稱せしが、後惣一郎と改め、明治二十六年更に現字に改む、資性豪放、明敏企業を好み、努力を惜まず、初め機業、醬油醸造、稻扱販賣等を營みしが、皆利あらず、後に産物會社を立て復失敗して、明治五年五月竊に東都に走る、時に二十四歳なり、然るに職を求めて得ず、窮して冷水を賣るに至る、後横濱にて薪炭及石炭商を營む、當時石炭の供給充分ならず、屢々拂底して價格騰貴せしかば、巨利を得たり、總一郎常に廢物利用に志し、瓦斯局よりコークス、コールドタールを拂下げて使途を考へ、又公衆便所設立を請負ひて生肥を賣り、皆利を得たり、而して事業の傳ふべきものはセメント製造、外國航路開始及水電事業の三とす、セメント製造は始め工部省の經營なりしが、收支償はず、明治十四年總一郎拂下を受け、拮据改善して利を收め、後歐洲大戰中及關東大震災後大に事業を擴張し、今やセメント王として全國産出額の三分の二を占むるに至れり、又明治十六年同志相謀り共同運輸會社を創め、三菱回漕部に拮抗せしが、後買収にあひ、更に淺野回漕部を創む、明治三十九年一轉して東洋汽船株式會社となり、巨船を購入して外國航路を開き、別に待賓館紫雲閣を建て、觀光客を引けり、この社歐洲大戰の際莫大の利潤を得しが、今は郵船會社に合併せり、又水力電氣の有望なるを認め、宇治川に計畫せしが、後之を他に譲り、更に吾妻川、利根川に起業せり、是等は合併して今關東水電と稱す、又神通川にも

計畫せしが、大正八年より更に庄川に試みたり、即ち米國技師を聘し日本最初の試みとして、東山見村小牧に高二百五十呎のコンクリート式堰堤を築き、上流に七哩のダムを現出し、之より引水發電せり、この水電幾多の難關を経て竣工し、昭和五年十一月運轉を開始するに至れり、東洋隨一と稱せらる、其他人造肥料、磐城石炭、東京瓦斯、秩父木材、札幌麥酒、石狩炭山、越後石油、鶴見海岸埋立より製鐵造船に至るまで、直屬會社三十五、關係會社五十余に達す、總一郎の業を起すや、計畫放膽規模雄大、人之を危ぶむも顧みず、寢食を忘れて經營し、實地に就きて研究し、萬難を排して所信を貫徹せずんば已まず、その堅忍不撓の努力は、常人の遠く及ばざる所なり、而して企業は同郷の出身安田善次郎の財力に負ふ所多く、兩人提携して東都の事業界を活歩す、又育英に志し、縣立商船學校創立費、水見郡藪田小學校建築費に金員を寄附し、又横濱市にゲーリー式綜合中學を創む、老來尙企業を志し、昭和五年歐米視察の途に上りしが、偶々食道癌を病みて歸り、十一月五日三田の本邸に歿す、年八十有三、事天聽に達し、正四位に叙せられ、勳二等瑞寶章を賜る、壽像は綜合中學校庭及水見郡藪田校内に建てられ、以て遺徳を後世に傳ふ。

島田孝之 字は維則、克堂、湘洲、歐東等の號あり、嘉永三年五月、今の東礪波郡般若野村に生る、壯年四方に遊學し、明治八年新川縣教務監督となり、翌年廢縣と同時に時の縣令山田氏に従つて、青森縣に赴き野邊地警察署長となれり、同十四年辭して國に歸り、同志を糾合して、同十五年礪波郡に北辰社を起し、後には越中改進黨を組織し、大に政界の爲に盡せり、爾來縣會議員に擧げらるゝ事三たび、其の間毎に議長となる、更に衆議院議員に擧げらるゝ事四たび、後中越鐵道株式會社社長、農工銀

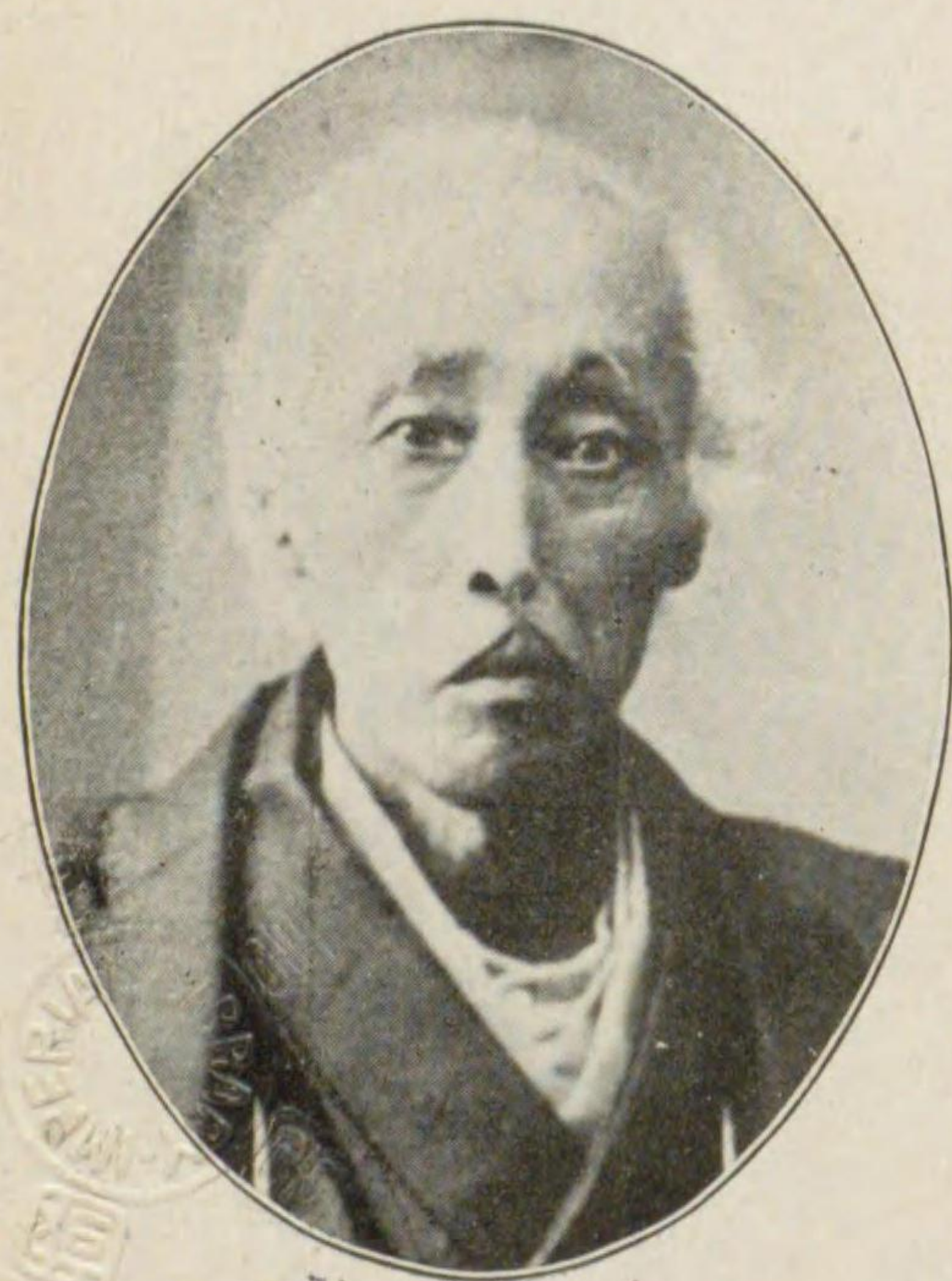
行頭取又富山日報社長となれり、同四十年一月十五日遂に病を以て歿せり、時に年五十八。

磯部四郎 富山藩士林英尙の三男なり、嘉永四年七月十四日を以て生る、幼名を秀太郎と云ひ出で、藩士林磯部宗右衛門の養子となる、十七歳の時禁闕警衛の爲め京都に移り住みしが、明治元年東京に出て、昌平校及大學南校に入り、尋て司法省民法寮の書生となる、同八年巴里大學に留學を命ぜられ、在學三年にして歸朝せり、同十二年判事に任ぜられ、同十九年には大審院檢事となれり、同廿三年富山縣第一區より選出せられて衆議院議員に當選し、尋て大審院判事に勅任せられしが、同廿五年官を辭し東都に辯護士を開業せしが、爾後累年東京辯護士會會長等の重職に就き、同四十年法學博士の學位を授けらる、四郎人となり磊落不羈、法曹界に重んぜられ著書も少からず、後に貴族院議員に勅選せられ、正四位勳三等に叙せらる、大正十二年九月二日卒去す、年七十二。

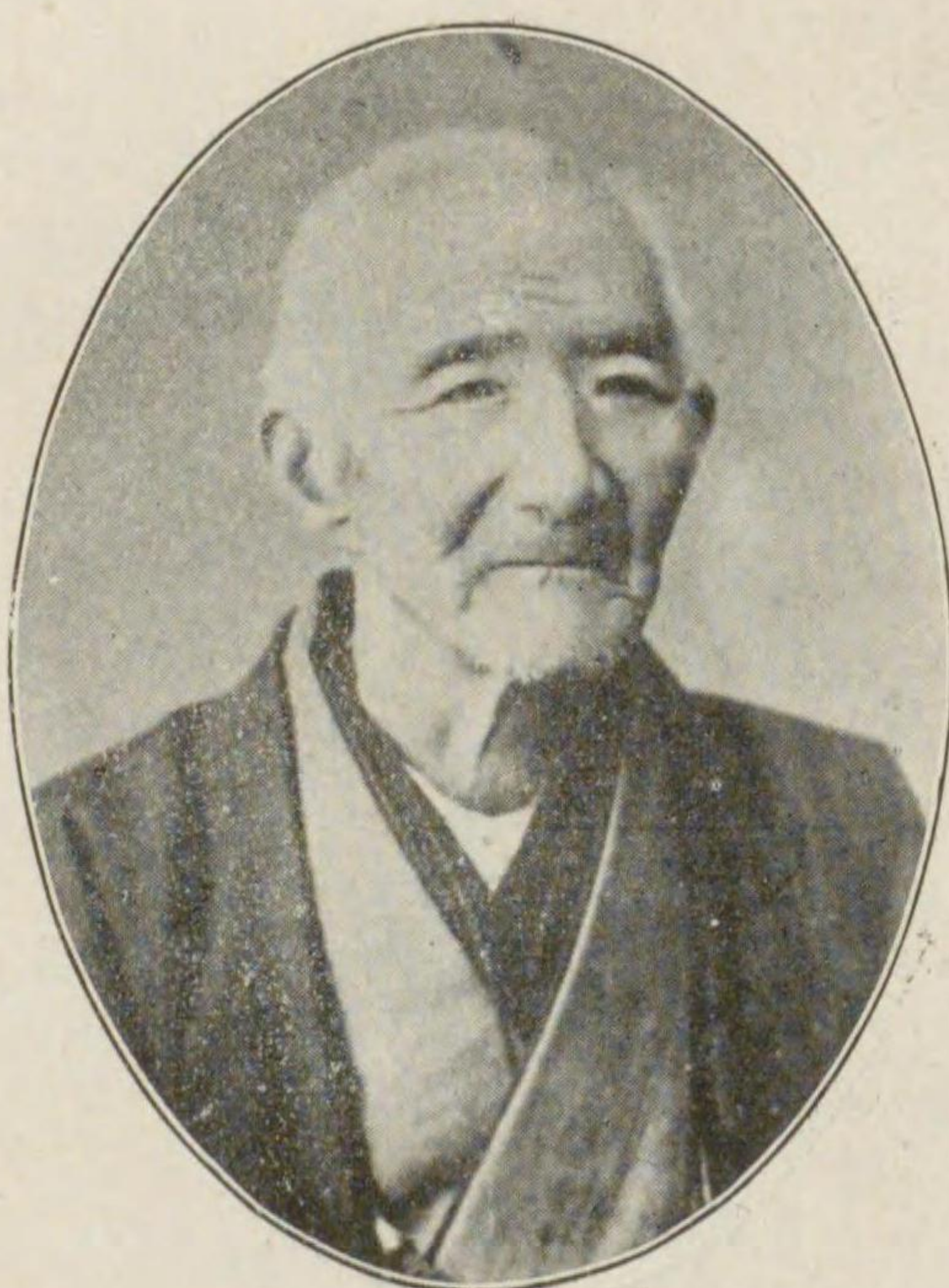
林忠正 醫師長崎言定の二男なり、嘉永四年高岡源平坂屋町に生る、出で、富山藩士林太仲の養子となれり、始め父より蘭學を受け、後佛語を學び明治の初め上京して大學南校に入り佛語科を修めしが感ずる所ありて退學し、明治十一年巴里世界大博覽會の日本美術工藝品陳列所通辯兼賣子となりて渡航し、閉會後尙滞在して日本美術品の販賣に従事せり、偶々川路大警視の歐洲視察及大山綱昌の憲法制度調査の爲渡佛せるあり、之を援けて功あり、其の後三井物産會社巴里支店員となり、同十七年獨立の美術館を經營し、後英米及支那の商況を視察して歸朝し、同卅三年佛國大博覽會に際しては、時の公使より意見を徵せられ、事務官長に任ぜられて渡佛し、大に盡す所ありたり、後東京に住み美術品貿易商を營み、同卅九年四月十日長逝す、年五十六。



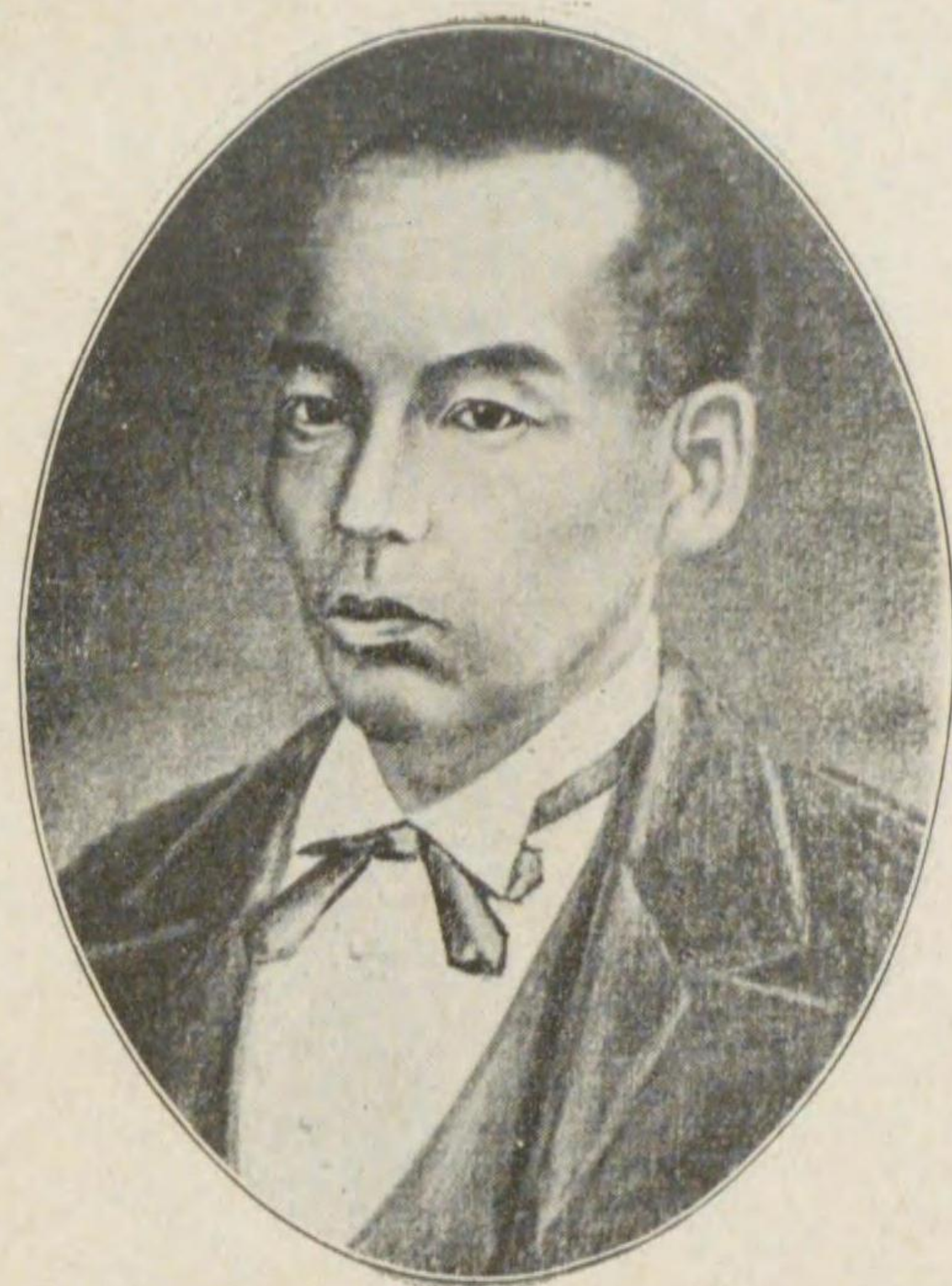
宮永良藏



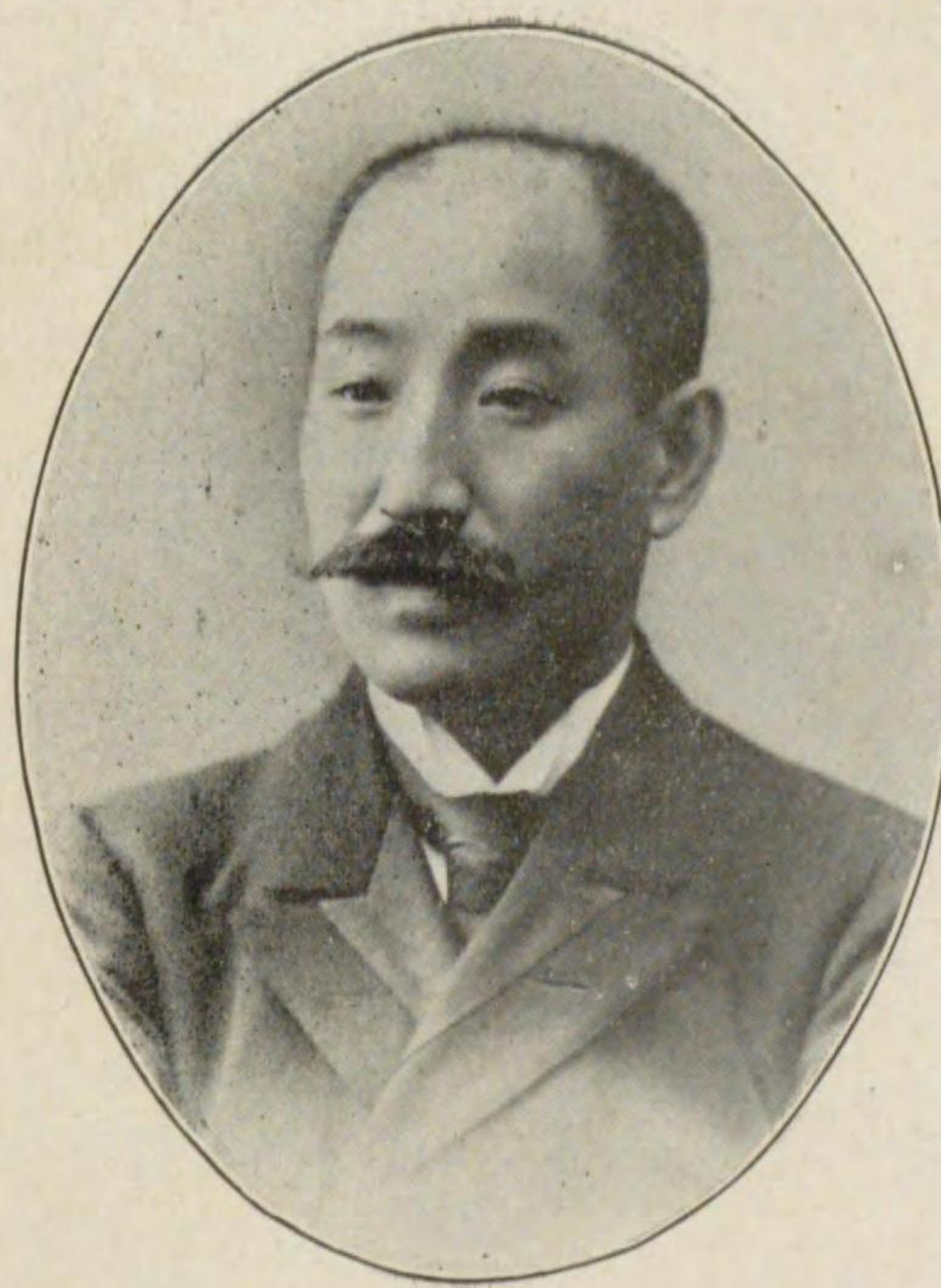
坪井信良



黒川良安



一 又 見 逸



林 忠 正



石 黒 藤 右 衛 門

高峰讓吉

醫師高峰剛太郎の長男なり、嘉永五年九月廿三日高岡御馬出町に生る、年十二歳にして加賀藩に拔んぜられ長崎に留學す、英人オルトに英語を學び、後ち京都及大阪に遊び、大阪醫學校にて理化學を研究し、明治五年工部省技術見習生となり、同十一年工科大学校應用化學科を卒業し、同十三年英國に留學を命ぜられ、グラスゴ大學及アンデルソニヤ大學にて工藝化學と應用化學を兼ね修め、幾多の工場をも見學し、同十六年以後農商務省御用掛米國ルイジヤナ州萬國博覽會事務官等に任ぜられ、始めて燐酸肥料等を携ひ歸り、東京人造肥料會社を創立せしめ、同廿三年再度渡米してより同地に居住すること三十有五年、其間新法を發見して特許權を得たるもの米國に於て十二件、英佛數十件に及ぶ、就中世界學者の聲望を一身に集めたるは「タカチアスターゼ」・「アドリナリン」の二大發見なり、之が爲に明治卅二年には工學博士を、同卅七年には工業會長より金牌を、同卅九年には藥學博士を、同四十二年には帝國學士院賞を授けられ、大正二年には帝國學士院の會員に列せられたり、歸朝後日本の現狀に鑑み、理化學研究所の創設を唱導したる結果、帝都に於て之が設立を見るに至れり、斯く世界的の發明を續出し、世を益する所多かりしかば、從四位勳四等より正四位勳三等に進み、大正十一年七月廿二日紐育の邸宅に於て歿せり、年七十一。

米澤紋三郎

安政四年三月五日下午新川郡入善町に生る、世々地方の豪族なり、紋三郎資性英邁剛毅敬神尊皇の念厚し、幼より學を好み東西の名著を涉獵して自得する所多し、維新以來自由民權の説起るや、地方民を啓導して嚮ふ所を誤まらざらしむ、明治十二年石川縣會議員となり、地方の政治に參與せしが、當時の縣政は越中に不利なる所多かりしかば、分立運動を起して目的を達せり、同

十六年八月富山縣最初の縣會議員に選ばれ、議長に推さるゝこと二回、明治三十六年三月衆議院議員となりしより當選すること二回、明治三十七、八年事件の後勳四等旭日小綬章を賜はる、其他義倉社入善銀行を創めて地方金融の便を計り、赤十字社陸海軍恤兵費等に多額の寄附をなし、魚津區裁判所入善出張所新設の際敷地及廳舎を寄附せり、郷民其徳を頌し像を同町花月公園に建つ、昭和四年病にかゝり十一月四日歿す、年七十三、危篤の報天聽に達し特旨を以て從六位に叙せらる、町民その遺徳を讃へて町葬を行ふ。

大矢四郎兵衛 安政四年十二月十九日西礪波郡鷹栖村に生る、地方の豪農なり、資性敦厚にして謙讓徳望あり、弱冠より政治に奔走し改進黨に屬す、明治十八年以後縣會議員に選ばるゝこと四回、同二十八年には議長に押さる、又明治三十一年以來衆議院議員に選ばれしこと四回、克く其任を完うせり、而して四郎兵衛の功績は交通機關の建設に在り、明治二十六年中越鐵道を敷設せんと欲し、資力を傾けて之を經營せしが、同三十年五月黒田福野間十哩五十五鎖の開通を見たり、是本縣に於ける最初の鐵道なり、其後南は城端に延び北は高岡に達して十八哩餘となり官線に連絡せり、更に尙伏木港に延長し交通運輸に便する必要を認め起工せしが、當時車馬運送業の妨害あり、土地買収には反對あり、小矢部川鐵橋架設亦容易ならず、爲に資金の大部を費し營業亦振はず、四郎兵衛遂に責を負ひ家産の大半を提供するに至る、而もこの線路は後日最有利となり、更に氷見に延長して今は省線に買収せらるゝに至れり、其他庄川河身改修、中越新聞の創刊、中越銀行の創設、礪波中學の創立等公私の爲努力せる所尠からず、晩年郷農數十人を率ゐて北海道に渡り、大矢農園を設けて開拓に従事せり、昭和五年病にかゝり九月二十五日歿す、年七十四、歿する日特旨を以て從六位に叙せらる。

長谷川庄藏 萬延元年十二月五日富山市五福に生る、資性沈毅寛厚、人に接するに城壁を設けず、事を處するに勇斷果決所期を達せずんば已まず、由來富山市は南東の風強く屢々火災を招く中にも明治三十二年の大火は全市を焼亡して一帶の曠原と化するに至り、庄藏も亦全焼の厄に遭ふ是に於て消防の急務なるを痛感し敢然一生を之に托するに至れり、當時世人は消防を以て賤職と見做せしに、庄藏は軍務にも等しき獻身的の業なるを説き、明治四十五年組頭に任ぜらるゝや、事務所を立て、殉難者慰靈祭を行ひ、大正八年には共濟機關を設け、同九年には消防義會を起し、同十五年には全國消防會議を開きて其の座長となり、翌年大日本消防協會を組織するに至れり、其の他洪水積雪に際し身を挺して危急を救ひたること一再に止まらず、關東大震災に際し直に救助品時價貳萬八千餘圓を集めて上京救濟に當りしが如き、至情の發露に外ならず、又市政に參與すること二十餘年、縣會議員に選ばるゝこと二回、大正十二年には縣會議長として克くその任に適へり、昭和四年四月四日歿す、年七十、事天聽に達し特旨を以て從六位に叙せらる、市民その徳を頌し本願寺派富山別院内に銅像を建て以て永遠に傳ふ。

岡田正之 字は君格、劍西と號す、元治元年九月五日富山に生る、藩士岡田信之の長子なり、資性温良恭儉にして徳望あり、歳十八にして東都に出て、碩儒重野成齊、藤野海南、小永井小舟等につき修學したる後、帝國大學に入り支那史を専攻し、明治二十年七月業を終へて史料編纂に執筆し、同二十

年七月陸軍教授となる。同卅六年五月東京帝國大學講師を囑託され、同三十九年九月學習院教授に任ぜらる。同四十年九月文科大學助教となり、大正十年文學博士の學位を受け、勅任官を以て待遇せらるゝに至る。大正十三年三月東京帝國大學教授となり、同十五年一月御講書始には長くも宮中鳳凰の間に於て漢書進講を仰付らる。同年九月高等官一等となる。同年退職と同時に、天皇皇后兩陛下より御紋章附銀製花瓶一箇及金七千五百圓御下賜あらせらる。同年十月十八日學習院名譽教授に推薦せられ、從三位勳三等に叙せらる。著書多く、支那歴史十八史略鈔、漢文讀本、漢文大系、漢和大事典、乃木將軍傳あり。昭和二年七月二十八日六十四歳を以て病歿す。

金岡又左衛門 元治元年一月二十二日上新川郡新庄町に生る。家は藥種賣藥を業とせり。又左衛門資性謹厚高潔にして、溫情あり、徳望郷黨に洽ねし。明治二十五年縣會議員に選ばれ、同二十七年議長となる。爾來縣政に貢獻すること三十有餘年。大正四年常願寺川朝日前築堤の如き更に同十二年同川上流の砂防工事を國營に移せる如き、その努力に依る所多し。明治二十七年以來衆議院議員に選ばれしこと四回、日清戰役後國費多端にして増稅相次ぐや、同志濱口吉右衛門、石原半右衛門と共に所謂三衛門組を組織し、政費節減案を提げて當局に肉迫せるは人の知る所なり。明治三十年富山電燈會社社長となりしより、終生其任を重ね、拮据經營社運の隆盛を圖れり。明治三十二年大久保用水を利用して水力發電となし、社業の擴張に従ひ神通川上流庵谷に第一、第二の發電所を増設し、又片貝黒部の水電を起し、氷見能登、中越、小松の各電氣會社を合併又は買收して、資本參千貳百五十萬圓の一大會社となり、昭和三年より日本海電氣株式會社と改稱して、北陸電業界に雄飛するに至る。

蓋し又左衛門の經始其宜しきを得たるに由る。其他伏木港の開發に努力して電化工業地となし、國際製藥會社を組織し、藥品の海外輸出を試み、又富山ラミー紡績會社の衰運を挽回せる等傳ふべきもの多く、各種の會長、銀行、會社の重役、新聞社長等公私の事業數ふるに遑あらず。又夙に育英に留意し、私財を投じて修學を獎勵すること四十年、而して何等の條件なく報償を受けず。今日その資金に依りて成功せるもの六十餘名に達す。亦常人の及ばざる所なり。昭和四年偶狹心症の襲ふ所となり、六月十日遂に歿す。年六十六。曩に明治三十七、八年事件の功により、同三十九年勳四等に叙せられ、大正十三年には紺綬褒章を賜はりしが歿せる日更に特旨を以て正六位に叙せらる。

廣瀬鎮之 元治元年六月八日氷見郡藪田村に生る。資性剛毅勤勉、夙に京濱の間に遊學し、業成りて明治二十三年淺野鑛山部に入り事務長となる。其間別に電線製作、煙草輸出等を營む。明治二十八年臺灣我が領有となるや、臺灣興業株式會社事務長となりて渡航し、石油採掘、樟腦製造、木材伐採、土木建築、土地開墾等萬般の社務に努力すること十有餘年。其の間臺北電燈米穀市場、印紙及度量衡賣捌等をも兼ねて成功せり。明治四十年歸りて氷見浦大敷網を創め、露領に漁區を求めて鮭鱒を漁し、更に金澤に硬質陶器製造を企て、獨逸より新機械を輸入し、京都より龜谷久左衛門を招き、京都又は氷見に製針業を起す等地方事業の發展に力む。又漁業の改善、漁場の整理、漁港の修築等水産業に關する勞效尠からず。更に地方森林會議員、帝國水産會評議員等を務む。大正六年以來衆議院議員に選ばるゝこと二回、政友會黨員として政務を調査せり。昭和五年病に冒され、十月二十一日歿す。年六十七。遺命して資産貳拾萬圓を居村に寄附し、永く村有財産となす。歿する日特旨を以て正六位に叙

せらる、同年十二月郷民追慕して銅像を建つ。

南日恒太郎 明治四年九月三十日上新川郡山室村長江にて生る、豪農喜平の長子なり、年少富山尋常中學校に入りしが病の爲め中途にして退き、爾後獨學を以て英文を研究し、遂に大成して多くの書を著はし學界に裨益を與ふ、明治二十六年五月始めて富山尋常中學校助教諭に任ぜられしより正則尋常中學校第三高等學校大學豫科講師を経て、同三十五年九月學習院教授に進む、爾來同院に勤續すること二十年高等官二等に進み、從四位勳四等を授けらる、大正十年九月職を辭せしが同十二年馬場家の寄附により富山縣立富山高等學校の新設せらるゝや同年十一月同校々長に補せられ、拮据經營に努むること六年、既に第一回卒業生を出し設備亦完整を告げて開校式も近からんとする時偶水泳監督中突然病を發して溺死せり、時に昭和三年七月二十日なり、年五十八、事天聽に達し、同日特に勳三等に叙し瑞寶章を授けらる、資性溫厚品格高潔己を持すること端嚴、人に接する懇誠其の徳望郷黨に冠たり、校葬は同月二十四日山室村の自邸に於て行はる、同日勅使の差遣あり。

嶺江義丸 明治五年三月廿日を以て生る、富山藩の家老嶺江基徳の孫にして父を曠と云ふ、幼より穎悟にして世人より神童と稱せらる、第四第一の高等學校を経て、明治廿七年東京大學哲學科に入り、同三十年七月業を卒へしが、偶々肺患に罹りしを以て京都に靜養し、其の癒ゆるを待ち眞宗大學等の講師となり、同卅二年九月東京高等師範學校講師に轉じ、翌年七月同校教授に進み、同卅六年七月文學博士を授けらる、義丸學識宏博研鑽懈らず、頗る述作に富み、就中著書孔子研究は尤も好

評あり、同卅六年十二月宿痾再發の爲、沼津に轉地療養せしが、病中尙ほ手に卷を捨てず、同卅七年六月十九日遂に逝去せり、年僅かに卅三。

昭和六年六月二十五日印刷
昭和六年六月三十日發行

非賣品

富山縣統計課編纂

印刷者 富山市立町十七番地
今泉安次郎

印刷所 富山市立町十七番地
今泉寫真製版印刷所

554
216

Printed text and a faint rectangular border on the right-hand page, possibly bleed-through or a watermark.

554
216

